

クトゥブディーン・シーラーズィー書写『モンゴルの諸情報』について

その基礎的研究とイルハン国初期の史料としての重要性¹⁾

高木小苗

(早稲田大学)

Akhbār-i Mughūlān as a Source of Early Ilkhanid History

TAKAGI, Sanae

Waseda University

This paper analyzes the recently published anonymous chronicle on Mongol history, *Akhbār-i Mughūlān dar anbāna'-i Quṭb* (Information about the Mongols) in the collective manuscript (*majmū'a*) of Quṭb al-Dīn Shīrāzī (1236-1311), one of the most esteemed scholars during the late thirteenth and the early fourteenth centuries, written in 685 AH (1286) in Konya, Turkey. This *majmū'a* belonged to the Library in Rab'-i Rashīdī, a majestic academic and tomb complex constructed in Tabriz by Quṭb al-Dīn's contemporary, the vizier Rashīd al-Dīn Faḍl-Allāh. In the initial sections, this chronicle contains brief remarks on Chingiz Khan and his children and heirs. It then discusses early Ilkhanid history from the time of its founder Hülegü's departure from Mongolia in 1253 to the third Ilkhan Tegüder Aḥmad's execution and the fourth Arghun's accession to the throne in 1285.

Although Quṭb al-Dīn usually specified the authors and titles of the texts he transcribed, he indicated neither the original manuscript nor the source of the chronicle in this particular *majmū'a*. There is no conclusive evidence that confirms whether he transcribed an original manuscript authored by someone else or if he himself wrote it. However, the texts indicate that the author had contacted the Mongols a few years after Hülegü's arrival in *Īran-Zamīn*. Furthermore, the author seems to have been more or less familiar with contemporary astronomy, the genealogies of the Hülegüid family and some families of the Mongol *amīrs* in *Īran-Zamīn* and certain Mongolian and Turkic

Keywords: The Ilkhanids (Ilkhanate), Iran, Mongols, Jāmi' al-tawārikh, Quṭb al-Dīn Shīrāzī

キーワード: イルハン国, イラン地域, モンゴル, 『集史』, クトゥブディーン・シーラーズィー

- 1) The author would like to thank the late Mr. Īraj Afshār, Dr. Ja'farī Mazhhab, Mr. 'Emād al-Dīn Sheykh al-Ḥukamāyī, Dr. Reza Pourjavadi and Mr. Javād Bashari for their provision of important materials and valuable comments. 本稿は平和中島財団の奨学金援助により実現したイラン留学の成果である。

terms and customs; the author shared a fondness for Sufism with Quṭb al-Dīn. Moreover, in *Akhbār-i Mughūlān*, there are few records of the Ilkhans' deeds and other events in their courts during Quṭb al-Dīn's absence. This *majmū'a* provides detailed information of the events when the Mongols were in Rūm, where Quṭb al-Dīn had resided for many years. Thus, he might have written the chronicle, or recorded his own data into the original text.

By comparing the texts of *Akhbār-i Mughūlān* with known historical sources written up until 1286, it is clear that the author never directly quoted and referred to *Tārīkh-i jahāngushā-yi Jūwaynī* by 'Aṭā Malik Jūwaynī, *Kayfiyat-i wāqī'a'-i Baghdād*, and the preface of *Żij-i Ilkhānī* by Naṣīr al-Dīn Ṭūsī, Quṭb al-Dīn's teacher, and other such texts. On the other hand, textual similarities between *Akhbār-i Mughūlān* and *Jāmi' al-tawārikh*, compiled by Rashīd al-Dīn in the early 1300s, showed that both the chronicles had a common source, or that Rashīd al-Dīn refers to *Akhbār-i Mughūlān*. In contrast, some texts of *Akhbār-i Mughūlān* assume a neutral position toward the Hülegü's family when compared with *Jāmi' al-tawārikh*, which was compiled in the reign of Ghazan Khan and dedicated to his younger brother Öljeitü Khan. This chronicle also contains some new information, which was not found in *Jāmi' al-tawārikh*.

Thus, *Akhbār-i Mughūlān* is one of the rare contemporary sources of early Ilkhanid history.

はじめに

1. 『モンゴルの諸情報』の特徴とクトゥブッディーン・シーラーズィー
 - 1-1. 『モンゴルの諸情報』の構成と特徴
 - 1-2. 『モンゴルの諸情報』の著者の人物像
 - 1-3. クトゥブッディーン・シーラーズィーと『モンゴルの諸情報』の関係
2. 『モンゴルの諸情報』とそれ以前に執筆された諸史料の関係
 - 2-1. 『モンゴルの諸情報』以前に執筆された主な諸史料

はじめに

クトゥブッディーン・マフムード・シーラーズィー Quṭb al-Dīn Maḥmūd Shirāzī (1236-1311) は、イルハン国 (1258-1336 頃) の支配下にあったイラン地域 Īran-Zamīn で活動した著名な知識人の一人である。彼は多

- 2-2. 『モンゴルの諸情報』のチンギス・ハンからモンケ・カーンの治世に関する記述
 - 2-3. 『モンゴルの諸情報』におけるフレグ西征の記述
 3. 『モンゴルの諸情報』と『集史』の関係
 - 3-1. 『集史』について
 - 3-2. 『モンゴルの諸情報』と『集史』の内容の共通性
- おわりに

くの著書を遺したが、同時に様々な分野の文献を書写しており、これまでに彼の手による写本が多数確認されてきた。また、それらの写本をもとに作成されたと考えられる諸写本も伝えられている。その中でもイラン議会図書館に所蔵されている写本集成 MS Majlis 593 は、その奥付より、クトゥブッディーンがイルハン国の領土であったアナトリア半

島のコンヤで 685/1286 年に作成した写本集成 *majmū'a* の写本であることがわかる。この写本集成の原本がイランの都市ゴム Qom のマルアシー・ナジャフィー図書館に所蔵されている写本集成 MS Mar'ashī 12868²⁾ であることが、最近、ジャヴァード・バシャリー Jawād Bashari, レザー・プールジャヴァーディー Reza Pourjavady とサビネ・シュミットケ Sabine Schmidtke により明らかにされた³⁾。この写本集成は、147 葉にわたる詩や神学・哲学分野の文献、ホラズムシャー朝期の書簡集から構成されている。またバシャリーは、この写本集成が、クトゥブッディーンと同時代を生きた宰相ラシードゥッディーン Rashīd al-Dīn Faḍl-Allāh Hamadānī がタブリーズ郊外に建造したラシード区 Rab'i Rashīdī の図書館にかつて所蔵されていたことを指摘している⁴⁾。

この写本集成には、17 葉にわたる 1203 年から 1284 年 8 月までのチンギス・ハンと彼の子孫に関する情報、主にチンギスの孫でイルハン国の創始者であるフレグによる西征から彼の孫である 4 代アルグン・ハンの即位 (1284.8.11) までの出来事について伝え

るペルシア語の記録が収められている (MS Mar'ashī 12868/2. ff. 22b-39b)⁵⁾。この記録の校訂は先述のバシャリーとイーラジュ・アフシャール Īraj Afshār により進められ、2010 年に『クトゥブッディーンの知恵袋の中のモンゴルの諸情報』*Akhhār-i Mughūlān dar anbāna'-i Quṭb* という書名で、校訂テキストと写本のカラー写真が出版された (本稿では便宜上、『モンゴルの諸情報』と表記する)⁶⁾。この記録は、本文の記述内容より、1281 年から 1284 年 8 月直後頃にかけて集中的に執筆されたと考えられる⁷⁾。そして写本集成の現存する最後の作品の奥付の日付が 1286 年 6 月であるため、クトゥブッディーンは 1286 年、またはそれ以前に『モンゴルの諸情報』を書写した可能性が高い⁸⁾。このように、これまでこの写本集成と『モンゴルの諸情報』について、クトゥブッディーン自身に関する研究や写本学・文学的見地からの分析が行われ、校訂テキストと写本画像も出版されているが、歴史学的研究はほぼ皆無の状態である。そこで本稿では、『モンゴルの諸情報』を歴史史料として使用するための前提となる基礎的研究を行い、特に今後、イル

2) Mar'ashī 2005: 637-643.

3) Bashari 2005: 526; Pourjavady and Schmidtke 2007. また、写本集成の最初と最後の数葉は失われており、この写本集成から書写されたと考えられるスレイマニエ図書館所蔵 MS Fātih 3141 と同様に、本来はこの写本集成には Ibn Kammūna による *al-Jadīd fī al-hikāya* (別名 *al-Kāshif*) の写しが含まれていた可能性がある (Pourjavady and Schmidtke 2007: 284)。但し、後述のイラン議会図書館 MS Majlis 10117 には同書は含まれていない (Nazari 2009: 143, 147)。

4) waqf-i Kitābkhāna'-i Rashīdī (ラシード図書館のワクフ) と刻まれた長方形の印章が写本に押印されている (Bashari 2005: 527-528)。ラシード区に関しては、岩武 1995; Özgüdenli 2002 参照。

5) Mar'ashī 2005: 638. 以下、特に言及しない限り、本文と注で表記する写本葉数は MS Mar'ashī 12868/2 のものである。

6) *Akhhār/Afshār*. これ以前にも、'Ināyat-Allāh Majīdī が同史料をフレグにより征服されたニザール派教主の居城であるマイムーン城の研究のために活用し、マイムーン城征服の箇所を校訂している (Majīdī 2005: 13, 203-205)。

7) 本文の初めに、チンギスの長子ジュチの一人 7 代宗主トダ・モンケ (r. 1381?-86) について、「トダ・モンケ、彼は現在帝王である、すなわち 680/1281-1282 年」(ff. 22b-24a) とあり、イルハン国 4 代アルグン・ハンの即位の叙述で記録が終えられている。プールジャヴァーディー達は『モンゴルの諸情報』のテキスト中に記されている最後の出来事であるアルグン即位の日を「Jumādā I 683/1 August 1285」と表記し、「683/1285」またはその直後に書き終えられたとしているが、実際には 1284 年のことである (Pourjavady and Schmidtke 2007: 287)。ただし、この執筆時期より後に、『モンゴルの諸情報』の著者、もしくは原本から写本を作成した人物により加筆が行われた可能性はある。

8) *Akhhār/Afshār*: 5-6. マルアシー図書館の写本目録には 685 年とある (Mar'ashī 2005: 638)。

ハン国初期の研究に用いるために、その性質を明らかにしたい。

『モンゴルの諸情報』はとりわけ、その執筆時期が1280年代であるために、イルハン国史料として稀有な価値を有する。なにより、イルハン国初期の数少ない同時代史料であり、またイルハン国初期に同国の成立経緯がどのように認識されていたかということを伝えている可能性があるからである。

従来、イルハン国初期に関する研究において使用されてきた主要なペルシア語史料として、まず、アターマリク・ジュワイニー‘Atā Malik Juwaynī (1226-1283) 著『世界征服者の歴史』*Tārikh-i jahāngushā-yi Juwaynī*⁹⁾ がチングス・ハンの勃興から主に1257年頃までのフレグの西征の記録を含む。また、クトゥブッディーンの師である学者ナスィールッディーン・トゥースィー Naṣīr al-Dīn Tūsi (1201-1274) の著作と伝えられている『バグダード陥落の記録』*Kayfiyat-i wāqī‘a‘-i Baghdād*¹⁰⁾ がある。これら二つの史料は著者の体験に基づく記録であり、フレグ軍によるバグダード征服までを網羅している。またペルシア語以外の言語による記録として、シリア正教会の司教バルヘブラエウス¹¹⁾ (1226-1286) が記した1286年のアルグン即位直後までのシリア語とアラビア語の年代記が挙げられる。他に、この時期のイルハン国の諸地方で執筆された地方史や、イルハン国内外で記されたアラビア語年代記、アルメニア語・グルジア語の年代記も重要な史料であるが、

イルハン国宮廷に関する情報を継続的に伝えているわけではない。このようにイルハン国初期に関する同時代の史料は多くはなく、13世紀後半のイルハン国に関する研究には、14世紀に執筆された諸史書も使用されてきた。例えば、宰相ラシードゥッディーン (k. 1318) により編纂された『集史』*Jāmi‘ al-tawārikh*、『世界征服者の歴史』の続編として記されたシハーブッディーン・アブドゥッラー・シーラーズィー Shihāb al-Dīn ‘Abd-Allāh Shīrāzī (1264-1334) 著、通称『ワッサーフ史』*Tārikh-i Waṣṣāf*¹²⁾、ハムドゥッラー・ムスタウフィー Ḥamd-Allāh Mustawfī (1281-1344) 著『選史』*Tārikh-i guzīda* (1330年頃執筆)¹³⁾ 等であり、これらの史書は7代ガザン・ハン治世から9代アブー・サイード治世末にかけて執筆された。

一方、『モンゴルの諸情報』はそれより10数年遡る2代アバガ・ハン治世末期から3代アフマド・ハン治世初期に書き始められ、4代アルグン・ハンの治世初期頃に書き終えられており、ガザン治世以前に執筆された数少ないイルハン国の歴史記録である。イルハン国ではハン位継承の際に複数の候補が存在することが多く、王族の反乱や処刑が少なくなかった。しかし、ガザンは彼の男子達が早世していたため異母弟オルジェイトを後継者と定めた。そしてガザンの死後、ハン位はオルジェイト、そしてオルジェイトの子アブー・サイードへと受け継がれ、ガザンと彼の弟と甥による支配は比較的長く続いた。つまり、

9) ジュワイニーと著書については2章で述べる。

10) 彼に関する研究は非常に多く、例えば黒柳 1966; Naṣr and Leaman 1996: 527-596; Daiber and Ragep 2000; Mudarris Raḍawī 1991; Pourjavady and Vesel 2000。また『バグダード陥落の記録』は本文英訳と注釈として Boyle 1961, 史料研究として Wickens 1962 等がある。

11) バルヘブラエウスの名の表記は、シリア語の発音が歴史的に変化しており、彼のアラビア語通称も存在するため、国際的には便宜上、ラテン語表記 Barhebraeus が使用されており、これをそのまま片仮名表記する傾向がある。彼については、Segal 1968; Teule 1997。

12) 同書は、1300年4-5月に序が書かれ、1303年3月にその一部がガザンに献呈され、1312年6月に4巻までが、5巻は10数年後に完成した。フレグによるバグダード征服から9代アブー・サイード治世半ばまでのイルハン国や諸地方の歴史について『集史』には見られない情報も含む (Jackson 2002; 岩武 1997)。

13) Melville 2003; Spuler 1968。

ガザン治世はガザンと彼の近親による継続的な支配が始まるきっかけとなった時期であった。

そのため、ガザンと彼の後継者達や宮廷に仕える人物達に献呈することを想定して執筆された14世紀初期の諸史書の記述内容が、特にフレグ家宗主ガザン・ハンによるイラン支配を正当化する傾向やそれに伴い様々な偏向性を備えているのは至極自然なことである。これに対し、ガザン即位の十数年前に執筆された『モンゴルの諸情報』は、少なくともガザン治世以降に執筆された諸史料に比べれば、フレグ家王族やイルハン国宮廷の官僚について中立的な立場から記載されている可能性がある。『モンゴルの諸情報』は、ガザンの直接の父祖や彼らと対立した王族や家臣達について、ガザン治世以降の史書とは多少異なる同時期の情報を提供してくれるだろう。

筆者は『モンゴルの諸情報』の内容の分析により、既知の諸史料に基づき構築されたイルハン国初期の通史や各ハン達の治世に対する従来の認識を再考することができると考えており、別稿を準備している。本稿では、そのための基礎的考察として、『モンゴルの諸情報』の内容の独自性や他の史書との情報の関係性などについて検討し、同記録の著者の視点やフレグ家王族に対する立場、そしてイルハン国史料としての同記録の性質を明らかにしたい。

また、クトゥブッディーンはこの記録の典拠を示しておらず、彼自身が著者であったのか、あるいは既存の記録を書写したのか明確ではない。アフシャールは『モンゴルの諸情報』の写本には記述内容の修正や変更がほとんど存在しないため、クトゥブッディーンはこの記録を書写したのであり、著者ではない可能性が高いと判断しているが、その上で今後検討されるべき課題であると述べている¹⁴⁾。そこで本稿では、『モンゴルの諸情報』の内容やその傾向を整理し、著者の人物像を具体化する。また、クトゥブッディーンの人物像と動向、人間関係を踏まえて、彼が『モンゴルの諸情報』の著者である可能性についても検討してみたい。

なお、先述の諸研究では言及されていないが、イラン議会図書館所蔵 MS Majlis 10117 は、後に MS Mar'ashī 12868 から直接書写されたと考えられる写本集成であり、『モンゴルの諸情報』を含むため、本稿執筆に際して参照した¹⁵⁾。また、最近発表されたバジャリーの論文によると、彼は校訂の最終稿提出後に同写本を確認したということである。MS Majlis 10117 が作成された時点では、MS Mar'ashī 12868 の損傷は現在に比べ進んでいなかった。そこでバジャリーは、MS Majlis 10117 により、アフシャールの校訂テキスト中の MS Mar'ashī 12868 の破損部分に相当する箇所を補足修正している¹⁶⁾。

14) *Akhbār/Afshār*: 9.

15) Nazari 2009: 143, 147. MS Mar'ashī 12868 の『モンゴルの諸情報』の folio. 30b 上部の欠損箇所 (*Akhbār/Mar'ashī*: 30b) は MS Majlis 10117 でも空白のまま残されているが、一部補足することができる。書写時点では欠損部分がより小規模であったことがわかる (*Akhbār/Majlis*: 52a)。また MS Majlis 10117 は、現在の MS Mar'ashī 12868 に見られる頁順の移動が起こる以前に書写されたようである。東京大学の塚修氏のご厚意により、同氏所蔵の写本を参照させて頂いた。ここに記し、謝意を表します。

16) バジャリーによる刊本 (*Akhbār/Afshār*: 45; *Akhbār/Mar'ashī*: 30b) の補足修正箇所を以下に引用する。() は MS Majlis 10117 の記述に基づいた補足箇所、破線部は刊本の修正箇所、[] はバジャリー自身による補足箇所である。“wa ū 'azīm bi-hashm wa bī … [写本文空白] … wa muddat-i hafdah sāl (pādshāhi-yi) in aqālīm ka zhikr raft (ka) pidarash girifta būd (bi:kard) chunān ka az-ū hīch (rañjī) wa zaḥmatī ba-kaśī na-rasid bā … [空白] … ka az ghāyat-i (raḥīm-dilī) ka dar khizāna wa (ṭawīla'-i ū) kardandī wa bi-giriftandī … [空白] … na-kushtī dar (har kār) ka pīsh-āmadi (ba-nafs-i khud) kifāyat kardi, (cha hama jang-i ū) bā mughūl būd na bā … [空白] … wa kārhā-yi buzurg wa sakht ka ū (kard Hülākū) … [空白] … zirā (ka) Hülākū [rā]jang ↗

1. 『モンゴルの諸情報』の特徴と クトゥブディーン・シーラーズィー

1-1. 『モンゴルの諸情報』の構成と特徴

『モンゴルの諸情報』は、前述のようにチンギス・ハンからフレグの遠征出立までのモンゴルに関する簡略な記録とイルハン国初期の通史から構成されている。まず冒頭では、チンギス・ハンと彼の後継者である3人のカーン達やチンギスの子孫に関する説明が約1葉にわたり非常に簡潔に記されている¹⁷⁾。その内容は、モンゴル高原のバルジュナの地における1203年のチンギス・ハンと家臣の臣従関係の成立と彼の正室の4子の名、そして次子2代オゴデイ・カーンとオゴデイの子3代グユク・ハン (r. 1246.8-1248.4) の即位、またチンギスの長子ジュチ一門の任命地と歴代宗主、末子トルイの長子4代モンケ・カーン (r. 1251.7-1259.8) の即位の経緯についてである。そして続けて、モンケの命令による弟フレグのアム河以西地域への出兵、モンゴル軍によるニザール派の拠点ギルドクーフ城の攻撃、その教主の居城マイムーン城とバグダードのアッバース朝カリフ政権の撃滅、シリア遠征について、また、フレグの

遠征の後にイラン地域（以下、イランと表記）に形成されたイルハン国の初代フレグ、2代アバガ、3代アフマドの治世の出来事と4代アルグン即位の経緯が16葉にわたり記されている。記述分量は、チンギスからモンケまでの時代が1葉、フレグの征服活動が約6葉、その後のフレグ治世の記述は約2葉半、アバガ治世は約2葉、アフマド治世は約5葉半であり、相対的にフレグの事績とアフマドの治世に関する記述が多い。

『モンゴルの諸情報』の全体の構成の詳細は末尾の表のとおりである。チンギスからフレグ治世までの記録が表1-1、アバガ治世が表1-2、アフマド治世が表1-3である。他の諸史料の記録とほぼ一致している基本的な出来事、その年代や日付には特に印を付していない。一方、明らかに事実とは異なると考えられる記述には、冒頭に×を記載した。管見の限りにおいて、他の史料には確認されない情報には★、特に『集史』の記述と共通している、または類似しており、『集史』以外の史料にはほとんど確認されない記述には◎、逆に、『集史』とは明らかに異なる、または矛盾する記述には▲を付した。全体を通して、その基本的内容は他の史料と大きくは異なら

↗ (ba-Uzbek būd) wa ū [rā] bā mughūl chūn … [空白] … ka az ān sakht(tar bāshad) (Bashari 2011: 63-65; *Akhbār/Majlis*: 52a)。なお、最後の () の中の “Uzbek” は、クトゥブディーンが MS Mar’ashī 12868 を作成した際の表現とは異なると考えられる。この時期の “Uzbek” と言えば、ジュチ家の10代宗主ウズベク (r. 1312-1341) が思い起こされるが、フレグとウズベクは同時代の人物ではない。フレグが対戦したジュチ家王族は下線部にあるようにウズベクではなく、5代宗主ベルケが派遣したノガイ達である。そのため、この「ウズベク」はウズベク・ハン個人を指すのではなく、14世紀中葉以降の諸史料の記述に見えるジュチ・ウルスの総称「ウズベク」を指すと解釈するのが妥当である。ジュチ家10代宗主としてジュチ・ウルス全体を支配したウズベクの名は、彼の治世中にジュチ・ウルスの総称として使用され始め、ジュチ・ウルス解体後もジュチ・ウルスに由来する遊牧集団はウズベクと呼ばれた。この意味のウズベクは、基本的に14世紀中葉から16世紀初めの諸史料に確認される(赤坂2000)。MS Mar’ashī 12868 が作成されたと考えられる13世紀末には、ウズベクという単語にはこのようにジュチ・ウルスを指す意味はまだなかった。この単語が『モンゴルの諸情報』のテキストに書き込まれたのは14世紀中葉以降のことと考えられる。恐らくMS Majlis 10117を作成した人物がMS Mar’ashī 12868の破損部分のものと表現の判読が困難であったので、前後の文脈から類推して “Uzbek” という単語を書き込んだか、または、その人物がMS Mar’ashī 12868のものとの表現を書き換え、もとの表現とほぼ同義であるとしなして、“Uzbek” を書き込んだのだろう。なお、バシャリーによるとアッバース・エクバル ‘Abbās Iqbāl は恐らくMS Majlis 10117を参照したことがあり、『モンゴルの諸情報』の存在を知っていた (Bashari 2011: 65-66)。

17) *Akhbār/Afshār*: 19-20; *Akhbār/Mar’ashī*: ff. 22b-24a.

ず、特に『集史』とかなり一致している。

このように『モンゴルの諸情報』が伝える様々な人物や出来事に関する基本的な情報は、『集史』や他の史料と一致している。しかし、その一方で明らかに事実とは異なると考えられる記録も複数存在する（表の×参照）。そこで、ここではチンギスの正室の子供達、彼の長子ジュチ家一門の歴代宗主、そしてフレグの子供に関する記述を取り上げ、なぜ著者の情報が誤っているのか考えてみたい。

まず、チンギスの正室の息子達について、「子供達のうち、人々の間で著名であった名高い4人の息子達がいた。チャガタイ・ハン、オゴデイ・ハン、トルイ・ハン、トゥーシー・ハン（＝ジュチ）」¹⁸⁾とあるが、当時のペルシア語の表現において兄弟の名前は年長者から記されるのが一般的であるので、著者は、実際は長子であるジュチを末子、次子であるチャガタイを長子、第3子であるオゴデイを次子、末子であるトルイを第3子と誤解していた可能性が高い。この4人の兄弟の関係は、『モンゴルの諸情報』以前に記された『世界征服者の歴史』、そして『世界征服者の歴史』を典拠としたバルヘブラエウスの年代記では正しく伝えられている¹⁹⁾。

次に、ジュチ家の歴代宗主と即位順は、「最初に、コングラン Ghūnkrān²⁰⁾であった。彼の後、シバン・ハン。彼の後、バト・ハン。彼の後、ベルケ。彼の死後、モンケ・テムル。

彼の死後、トダ・モンケ、彼は現在、すなわち680/1281-82年某月、帝王である」²¹⁾と記録されている。しかし、実際のジュチ家の歴代宗主は、ジュチの後、第2代がジュチの次子であるバト (r. -1255/6) で、バトとベルケの間に、バトの子である3代サルタク (r. 1256?) と4代ウラクチ (r. 1256?) が続いた。そして5代がジュチの第3子ベルケ (r. 1256?-1266)、6代はバトの孫であるモンケ・テムル (r. 1266/7-1280?)、第7代が彼の弟トダ・モンケ (r. 1381?-86) であった²²⁾。すなわち『モンゴルの諸情報』は、5代以降のジュチ家宗主の名と即位順を正しく伝えているものの、それ以前の宗主達に関する情報は不正確である。最初のコングランはジュチの長子オルダの第4子であり、オルダが統轄したジュチ家領域の東部の左翼ウルスを継承したことが指摘されている²³⁾。また、シバンはジュチの第5子で、兄バトがオゴデイ・カーン治世の西征の後、新たに獲得した征服地に移ると、シル河流域の元来のバトの遊牧地を継承したと考えられている²⁴⁾。二人ともジュチ家領域東部の有力者で、その名が当時のイランに伝わっていたということは十分考えられ、『モンゴルの諸情報』の著者が彼らを宗主と誤解していた可能性がある。これに対し、『世界征服者の歴史』には、ベルケ以前の歴代宗主の即位順と即位に到る経緯は正確に記録されている²⁵⁾。

18) *Akhbār/Afshār*: 20.

19) *Jahāngushā*: v.1. 29; *Chronology*: 353; *Mukhtaṣar*: 227. 同時期にデリーで完成した後述する『ナーシール史話』にも正確に書かれている (*Nāṣiri*: v.2. 149, 151, 167, 178)。

20) Afshārはこの人名について『集史』には記録がないと指摘しているが (*Akhbār/Afshār*: 20)、コングランに比定される。『世界征服者の歴史』では Qūnqūrān, Qūnghūrān (*Jahāngushā*: v.3. 53)、『集史』では Qūnqūrān と表記されている (*Jāmi'/Rawshan*: 718; *Jāmi'/Blochet*: 103)。

21) *Akhbār/Afshār*: 20.

22) ジュチ家系譜と歴代宗主の即位順、年代については、赤坂 2005 末尾系図参照。

23) 左翼ウルスについては、村岡 1999; Allsen 1987; 赤坂 2005: 136-175。コングランについては、Allsen 1987: 18; 赤坂 2005: 145。

24) 赤坂 2005: 134.

25) *Jahāngushā*: v.1. 222-223. 『ナーシール史話』にもジュチの後をバトが継ぎ、彼の死後、モンケによりサルタクが任命され、その後ベルケが強くなったことが記されている (*Nāṣiri*: v.2. 213-218)。

このように『モンゴルの諸情報』の記述は上述の二つの項目において不正確で、『世界征服者の歴史』の伝える情報と一致していない。『モンゴルの諸情報』の著者は、少なくともこれらの記述については、『世界征服者の歴史』を踏襲しておらず、執筆時に『世界征服者の歴史』の該当箇所を参照していないようである。また、『世界征服者の歴史』の著者アターマリク・ジュワイニーは、父に従い、1243年頃より、当時、モンゴルがアム河以西地域の統治機関として設置していた阿母河等処行尚書省²⁶⁾に出仕し、モンゴル高原のカーンの宮廷を二度訪れ、フレグの遠征時にも随行していた人物である。彼にはチンギス・ハン家の歴史や王族の系譜情報を知る機会があった。それに比べ、『モンゴルの諸情報』の著者は、モンゴル本土やチンギス・ハンの一族に関する知識が限られていたようである。著者は恐らくイルハン国の領域の出身で、モンゴリアやイルハン国以外のモンゴル支配地域を訪れた経験はなかったと考えられる。また、ベルケ以降のジュチ家の宗主に関する知識は正しいので、1256年以降にモンゴルと接触を持つようになった可能性が高い。それに対し、それ以前のモンゴルの動向については、間接的に情報を得たために誤解が生じたのだらう。

最後に、フレグの王子達の記録についても確認しておく。『モンゴルの諸情報』にはフレグの王子は13人とあるが²⁷⁾、『集史』は14人であったと伝えている。周知のように『集史』のモンゴル系譜情報は非常に詳細で正確であり、『モンゴルの諸情報』の著者は

フレグの王子達のうち、いずれか1人の存在を把握していなかったと考えられる。『モンゴルの諸情報』に全く記録がないフレグの王子は、次子ジュムクル、第5子タラガイ、第8子エジェイ、第10子イエスデル、第13子シバウチである。このうちジュムクルは、フレグの西征の際、モンゴル本土のフレグの宿営に残り、フレグ治世末期にイランに移動する道中で病没し、第5子タラガイもイランへの移動中に落雷により死去した。彼らの家族がアバガ治世にイランに到着したことは『集史』と『モンゴルの諸情報』に伝えられている²⁸⁾。『モンゴルの諸情報』の著者は、これらの王子のうち、イラン地域には来なかったジュムクルとタラガイのどちらかの存在を知らなかった可能性が高い。

同様にアバガ治世にイランにやって来たフレグの第4子テクシについて、『集史』には彼の子の一人がトプトであったと伝えられている。一方、『モンゴルの諸情報』では、トプトは「アフマドの弟の子であった。トブシンの息子」²⁹⁾と説明され、フレグの第6子トブシンの子と記されている。テクシはモンゴル本土から1268年にイランに到着し、1271年頃に死去しており、『モンゴルの諸情報』の著者は彼と彼の家族構成についてあまりよく知らなかったのであろう³⁰⁾。このように『モンゴルの諸情報』の著者は、フレグ家の祖先やフレグ家以外のモンゴル王族、またフレグ家王族の中でも、フレグの西征の際にモンゴル高原に残っていた王子達やその家族について、不正確な情報を伝えている場合がある。しかし、それは著者がモンゴル高原や

26) カーンに直属する征服地管理機関の一つで、アム河以西地域を管轄下に置いていた。同機関については、本田1967参照。

27) *Akhbār/Afshār*: 44.

28) *Jāmi' /Rawshan*: 965, 967.

29) *Akhbār/Afshār*: 56.

30) テクシはユシムトの死後、トブシンの前に死去したようである。『モンゴルの諸情報』では、トブシンについて、「ユシムトには弟がいた。非常に勇敢で賢明な人物で、アバガの代わりにホラーサーンにいた。彼も死去した」と記されているが、この箇所ではこの人物がトブシンであったとは伝えられていない (*Akhbār/Afshār*: 47)。本文のように別の箇所で、トプトの父としてトブシンの名が挙げられている。

イルハン国以外のモンゴル支配地域国を訪れたことがなく、モンゴルと接触を持つようになった時期がフレグのイラン到着以降であったためと考えられる。これらの傾向は、『モンゴルの諸情報』のイルハン国史料としての価値を損なうものではない。

また、『モンゴルの諸情報』の著者は、チンギス・ハン家王族や歴代カーン達、フレグのイランへの進軍過程、ジュチ家宗主に関して記録しているものの、その内容は簡潔である。そして、例えばフレグ西征中に伝えられた長兄モンケ・カーンの死、その後起きたフレグの次兄クビライと弟アリク・ブケによる後継者争い、クビライ・カーンや元朝のカーン達、また『集史』「アバガ・ハン紀」においてかなりの紙面が割かれているチャガタイ家の王族バラクによるホラーサーン進攻については全く言及していない。その一方で、フレグ西征以降の部分の記録は、著者がその場に居合わせたかのような非常に具体的なエピソードを含み、会話文や文節の倒置等、臨場感のある筆致を有している。日付の記載もアバガ治世の記録の一部でのずれとアフマド治世の記録において月を書き間違えているのを除けば、ほぼ正確である。特に3代アフマド治世のアフマドと彼を処刑してハンとなった甥アルグンの対戦については、アフマドと彼の軍隊の日々の動向が克明に記録されている。著者の知識量は相対的にイルハン国に関して多く、彼の主な執筆対象はイルハン国の歴代ハン達や王族の動向である。同時期のイルハン国以外の地域で活動するモンゴルは、著者の執筆目的や関心対象においてそれ程重要な位置を占めていなかったと言えよう。

また、『モンゴルの諸情報』では、モンゴル・チュルク語起源の用語、初出の人名や地名等の固有名詞の多くには母音記号が付され³¹⁾、

『集史』の表記とは異なるつづりが使用されている場合がある。そのため、『集史』の諸写本では不明確な人名を特定する際に参考になることもある。例えば、アフマド治世に、アフマド軍に従い、アルグンと敵対し、殺害されたある王族の名は、『集史』の刊本や写本では *Yasār*, *Basār*, *Yāsār*, 他にアラビア文字 *bā* や *yā* の点が記されていないこともあり、表記が一定していない。これに対し、『モンゴルの諸情報』の写本では母音記号を付して、*Başar* と表記されている³²⁾。

また、『集史』には、イラン地域の北西部に居たアフマドと東方のホラーサーンに居住していたアルグンの対戦の際、1284年冬に、「アフマドが前衛として、カズウィーンから出発し」、南東のレイの方面へと進軍する様子が記されている。しかしその一方で、その直後には、同年4月に、アフマドがカズウィーンより遙か北西のムーガーン地方から大軍を率いて出発したという記述が存在し³³⁾、この部分の『集史』の記録は明らかに混乱している。『モンゴルの諸情報』には、1284年4月に、アフマドがムーガーンを発ったとのみ記されており、それ以前に彼が自ら兵を率いて出立した記録はない。そのため、『集史』のこの部分の主語は本来アフマドではなく、この直前の文の主語であるアフマドに仕えるアミール、アリナクであったと考えられる。このように、『モンゴルの諸情報』の内容を、他の史料と対照することにより、新たな事実を見出せる可能性があるのである。

『モンゴルの諸情報』のフレグ西征以降の内容は、基本的には他の史料と一致しており、明らかに誤った情報は非常に限られている。そのため、『集史』と異なる記述(▲)を他の史料と対照して検討したり、他の史料には確認されない情報(★)が妥当であるかどうか

31) ただし、写本に表記された発音は『集史』と必ずしも一致せず検討を要する。

32) *Jāmi'/Rawshan*: 1134-1137, 1144, 1914; *Jāmi'/Jahn*: 51, 56; *Jāmi'/Alizada*: 178-180, 189; *Akhbār/Afshār*: 56, 63.

33) *Jāmi'/Rawshan*: 1135; *Jāmi'/Alizada*: v.3. 179; *Jāmi'/Jahn*: 51.

か考察した上で、イルハン国史研究に反映することにより、イルハン国に関する従来の様々な見解を再考することができるだろう。

1-2. 『モンゴルの諸情報』の著者の人物像

前述のように、著者は、フレグがイランに到着した1256年頃からモンゴルと接触を持つようになった人物であったと考えられる。『モンゴルの諸情報』には、「我らが、しばしば、彼(=フレグ)の宮廷で見たように、誰もがこれらの諸地方のことを1日で上奏したが、彼は各人に対してそれについて良き命令を述べられた」³⁴⁾とあり、著者はフレグ(d. 1265)の生前に彼の宮廷に頻繁に出向く機会があったことがわかる。そのため、著者は、同時代に年代記を執筆した前述のバルヘブラエウスのように、ハンの遊牧経路や冬営地に近接していた主要都市マラーガやタブリーズの図書館で、モンゴルに関する記録や『世界征服者の歴史』等の様々な資料を閲覧する機会を持つことが可能な環境にあっただろう。

『モンゴルの諸情報』の冒頭の記録は、チンギスと彼の軍隊がモンゴル高原のバルジュナという水無河に滞在した際、食物がなく、チンギスは一羽の雀の肉を70に分け、自分と兵士達全員に行き渡らせ、その結果、兵士達がチンギスに臣従したというエピソードである。これは、東西史料に見られるいわゆる「バルジュナの誓い」の一つのヴァリエントであり、第2節で他の史料と比較する。兵士達のチンギスに対する臣従は、『モンゴルの諸情報』では、兵士達はチンギス・ハンの「従者 murid, 追従者 taba³⁵⁾」になった。そして彼に対して命を預けた³⁵⁾と、スーフイズムの導師 shaykh と弟子 murid の関係を連想させる表現で描かれている。このようにスー

フィズム的な表現を著書に使用していることより、『モンゴルの諸情報』の著者は多かれ少なかれスーフイズムに親しんでいたと考えられる。

また、『モンゴルの諸情報』には、この「バルジュナの誓い」の年が「599/1203年の某月、ルーム人達の計算法では1514年、ヤズドギルドの計算法では572年、ウイグルの暦では豚年、そしてヒタイの暦では癸 kŭy/gŭy³⁶⁾」と記されている。これらの暦はそれぞれイスラームのヒジュラ暦、アレクサンダー暦、ゾロアスター暦、ウイグル暦、干支を指している。この『モンゴルの諸情報』の表現と同様に、クトゥブッディーン・シーラーズィーが師事した学者ナスィールッディーン・トゥースィー(1201-1274)による『イルハン天文表』*Ẓij-i Ilkhānī*の序文にも、この出来事の年が5つの暦を用いて記録されている。ただ、両史料の暦の換算と表記は若干異なり、ゾロアスター暦は「570年」、干支はより詳細に「癸亥 kŭy khāy」と記されており、完全には一致していない³⁷⁾。そのため、『モンゴルの諸情報』の著者は少なくとも『イルハン天文表』の序文を引用したわけではなく、『モンゴルの諸情報』執筆に際し、改めて、恐らくは自ら暦の換算、確定を行った可能性がある。また、『モンゴルの諸情報』には、「処女宮の昇天の時刻」、「人馬宮の昇天」等の記載も確認される³⁸⁾。このように著者は、暦や天体の動向に関して知識を持ち合わせた人物であったと考えられる。

そして、『モンゴルの諸情報』の著者は、フレグ西征以前のモンゴルについて、先述のように若干誤解していた部分はあるが、同時に正確な知識も持っていたことが、前節で指摘しなかった記述よりわかる(表1-1)。例

34) *Akhbār/Afshār*: 22.

35) *Akhbār/Afshār*: 19.

36) *Akhbār/Afshār*: 19.

37) *Ẓij/Boyle*: 250-251. 同書とイルハン国期の暦については、諫早2008参照。

38) *Akhbār/Afshār*: 57, 65.

えばハン qan/khān の称号を採用し、カーン qa'an/qa'an の称号を採用しなかったと言われている3代グユク・ハン³⁹⁾の名は、Küyük Khān と表記されている⁴⁰⁾。さらに、イルハン国で活動したモンゴル王族やアミールの親子関係はかなり正確に把握している。フレグの王子達について、例えば、フレグの第11子モンケ・テムルは、「(アバガの) 弟、オルジュイ・ハトンの子であり、(アバガが) 軍隊の指揮権を彼に与えていた」、またフレグの第14子トガ・テムルは「テグデルの同母弟」、すなわちイルハン国3代テグデル・アフマドの同母弟であると記されているように、どの王子がどのハトンの子であるかということまで付記されている⁴¹⁾。さらにフレグの西征に従軍し、アバガ治世に謀反を起こしたチャガタイ家王族テグデルの子は、3代アフマド治世にはアフマドに従っていたが、「ウマル・オグル、裏切り者のテグデルの息子」と表記されており、著者は彼の素性を正確に把握している⁴²⁾。

モンゴルのアミール達についても、例えばジャライル部のアミール「エレゲイ・ノヤンの子トク」、スルドス部のアミール「スドンの子トダウン」、またオイラト部のアミール「アルグン・アカの子ラクズィー・クルゲン」については、別の箇所「アバガの妹でバーバーと呼ばれていたラクズィーの妻」と、どの皇女を娶りクルゲン(駙馬)となったかということまで説明されている⁴³⁾。このように著者はモンゴル王族や重臣の血縁関係についてかなり正確な知識を有していたのである。

さらに、『モンゴルの諸情報』では、モンゴル・チュルク語起源の用語が比較的頻繁に使用されている。それらの用語には、ペルシア語・アラビア語の類義語や語義が付記されている場合がある。例えば、「モンゴル語ではアミールはノヤンと言われる」、「我々の ĩnjū, すなわち我々の私有地 khāṣṣa, 「ḡ然に到らしめた ba-yāsa rasānidand」(すなわち、処刑した), 「ūlja'ī, すなわち戦利品 gharāti, 「gejige, すなわち、先鋒隊 yazak の後方にいる部隊」⁴⁴⁾, 「8 tūmān, トマンの軍隊とは1万である」⁴⁵⁾(ここではアラビア文字のつづりに従い転写した)。また、モンゴルの進軍以後、モンゴルはイランの様々な地に名を付け、それらの地名は特にモンゴル人達の間で通称となっていたが、『モンゴルの諸情報』では、カズウィーンの近くの「ジャマールアーバード、モンゴル人達はそこをアク・ハージャと呼んでいる」とペルシア語の地名と並べて表記されている⁴⁶⁾。このような解説は、著者の母語はチュルク語、モンゴル語ではなかったが、著者がこれらの言語起源の用語やそれらの用語に関係するモンゴルの慣習にある程度通じていたことを示している。また、将来、『モンゴルの諸情報』が他者に読まれることを想定し、読者のために解説を付した可能性もある。

さらに『モンゴルの諸情報』には、モンゴルの慣習や戦法に関する情報も含まれている。フレグの西征の際にモンゴルが運んだ投石器や弩等の武器、麵類などの糧食⁴⁷⁾、城攻めの際に作られた塹壕や包圍網 nerke⁴⁸⁾の描

39) Rachewiltz 1983.

40) *Akhhār/Afshār*: 20.

41) *Akhhār/Afshār*: 48, 60.

42) *Akhhār/Afshār*: 59.

43) *Akhhār/Afshār*: 4, 48, 58, 61.

44) *Akhhār/Afshār*: 57; gejige は先鋒軍の後方にいる援軍 (Doerfer 1963: 491-492). yazak/yezek はここでは先鋒隊を指す (*idem.* 1975: 163-165).

45) 前から順に *Akhhār/Afshār*: 27, 40, 54, 43. 最後の2つは *ibid.*: 57.

46) *Akhhār/Afshār*: 57.

47) *Akhhār/Afshār*: 25.

48) *Akhhār/Afshār*: 28, 56; nerke については, Doerfer 1963: 291-296.

写や、「モンゴルのヤサでは帝王位（の継承）において（前帝王の）遺言に代わるものではなく」⁴⁹⁾という記録などは、著者がモンゴルの軍隊やヤサ（ジャサ）に関しても知識を持っていたことを示している。

また、他の史料では散見されない用語も使用されている。3代テグデル・アフマド治世にアフマドの異母弟コンコルタイが彼を裏切り、4代アルグン・ハンと共にアフマド打倒を計画したため処刑された際に、彼のアミールであるクチュク達も処罰された。『モンゴルの諸情報』によると、クチュクは百回の杖刑に処せられたが黙秘し、アフマドはクチュクとクチュクの息子の処刑を命じた。しかし、アフマドの家臣達は、「言った。「クチュクと彼の息子は2人とも *kukarmishi*⁵⁰⁾した」。これは、モンゴルの慣用語である。すなわちヤサに到らしめたい者が、もし *kākū*⁵¹⁾という鳥の名を言えば、殺されない。なぜなら、もしその者を殺せば、殺した者には不吉なことがあるだろうということがよく知られているからである。アフマドはクチュクを殺害し、彼の息子は残すように命じた」⁵²⁾。この用語 *kukarmishī*（アフシャールは *gukarmishi* と解釈している）は、アフシャールが指摘しているようにデルファー Gerhard Doerfer の研究でも取り上げられておらず、当時の文献に散見される表現ではない。著者個人がモンゴルの慣習を見聞していたと考えられる。

このように『モンゴルの諸情報』の著者は、東西の暦、天体に関する学識やスーフィー的傾向を備え、モンゴルの歴史や系譜、用語、

慣習等に関する知識を持っていたのである。これらの情報には、その真偽は別として当時のモンゴルに関する民俗学的、言語学的な情報も含まれており、今後、検討されるべきである。

1-3. クトゥブディーン・シーラーズィーと『モンゴルの諸情報』の関係

前述のように、アフシャールは写本集成の『モンゴルの諸情報』にはほとんど誤記や修正がないため、クトゥブディーンは書写したのであり、著者ではない可能性が高いと考えている。マルアシー図書館の写本目録では、クトゥブディーン自身が『モンゴルの諸情報』の著者である可能性が示唆されている。それに対し、ブルジャヴァーディーとシュミットケはその可能性を否定してはいないものの確定できる根拠はないと述べている⁵³⁾。

アフシャールはその他の根拠として、特に同一の人名、用語のつづりが写本の中で一定していないことを挙げており、著者が原本の表記をそのまま書写したためだと推測している（例：一族 *urūgh/ürq*）。また、彼は先に引用した、著者がフレグの宮廷での業務遂行の様子を度々目撃していたことを示唆する記述にも着目した。アフシャールは、クトゥブディーンがマラーガで師匠ナスィールディーン・トゥースィーに出会ったのは、フレグの死の数年前 660/1261-1262 年であったとミーノヴィー Mujtabā Minuwī の研究を引用して⁵⁴⁾ 指摘している。また、アフシャールは、クトゥブディーンがフレグ

49) *Akhhār/Afshār*: 65.

50) *kākū* という鳥の名から形成された動詞の派生語である可能性もあるため、*kukar* の部分の母音は異なるかもしれない。比較的発音の近い動詞として、*geyirmek*（げっぶする）（Redhouse 1890: 1558）、*kekir-*（げっぶする）、また *kigür-*（導入する）、*köker-*（青色になる）、*kökre-*（雷が鳴る、大きな音、声を立てる）（Clauson 1972: 712-713）等がある。

51) 管見の限りでは、*kākū*, *gägü* には鳥の意味がみあたらない。*qāqū*, または *ghāghū* は、鳥の鳴き声に由来する名詞で、*goose*（ガチョウ、ガン）、*fox*（狐）の獲物となる鳥（野ガン、白鳥、鶴等）を指す（Clauson 1972: 608）。

52) *Akhhār/Afshār*: 56.

53) Mar'ashī 2005: 638; Pourjavady and Schmidtke 2007: 287.

54) ただし、ミーノヴィー自身は、660年頃 (*hudūd*) と記している（Minuwī 1969: 168）。

の宮廷を訪れたことを示す史料は、トゥースィーが彼をフレグ (d. 1265 初) のもとに連れて行ったという記録のみであり、彼が宮廷でのフレグの日常的な業務遂行について言及できる程、何度もフレグのもとを訪れたという記録はない、とも述べている⁵⁵⁾。

しかしアフシャルの挙げたこれらの根拠は、クトゥブッディーンが著者ではなく、『モンゴルの諸情報』の原本を書写したということに絶対的に裏づけているわけではない。アフシャル自身も述べているように、事前にクトゥブッディーンが『モンゴルの諸情報』の下書きを作成しており、それに基づいて『モンゴルの諸情報』の写本を作成した可能性もある。それならば書き間違いや推敲も少なく済むはずである。また当時、特にチュルク語、モンゴル語由来の単語のペルシア語における正書法は確立しておらず、一つの作品の中でも単語表記は必ずしも統一されていなかった。アフシャル自身もこのことに言及している。

さらにクトゥブッディーンがマラーガに到着した時期についても、同時期にマラーガに滞在し、天文台の図書館員であったイブヌル・フワティ *Ibn al-Fuwaṭī* (1244-1318) の人名事典によると、ミーノヴィーの説より2年近く早い658/1259-1260年にマラーガに到着したという⁵⁶⁾。また、ミーノヴィーの典拠と推定される15世紀前半にホンダミール *Khwāndamīr* により執筆された史書『伝記の伴侶』*Ḥabīb al-siyar* 以外に、14世紀に書かれたアッサラーミー *al-Sallāmī* (d.

1372-73) のバグダードのウラマー伝にもクトゥブッディーンがフレグに会ったという記述がある⁵⁷⁾。それにクトゥブッディーンとの接触を示す記録があまり伝えられていないことは、必ずしもクトゥブッディーンがフレグの宮廷をほとんど訪れなかったことの根拠とはならない。そこで本節では、クトゥブッディーン自身が著者であった可能性の有無について、『モンゴルの諸情報』の内容を踏まえて検討してみる。

クトゥブッディーン・シーラーズィーは、医師であった父ディヤーウッディーン・カーザルーニー *Ḍiyā' al-Dīn Maḥmūd Kāzarūnī* の死後、彼の病院を継いだ。その後、医学を究めるために、父親の病院があったシーラーズを離れ、前述のように1259-60年頃にマラーガで天文台の建設に従事していたナスィールッディーン・トゥースィーに師事し、天文台の業務にも携わった。その後、ホラーサーン、イラク・アジャム、バグダード、ルーム (アナトリア) の諸地方を渡り歩いた。そして天文学、地理学、数学、科学、哲学、神学、音楽等の諸学に通じ、様々な分野に関する著作を残した⁵⁸⁾。また彼の父親はシハーブッディーン・ウマル・スフラワルディー (d. 632/1234-1235) に師事してヒルカ (外套) を得たスーフィーであり、彼自身も10歳で父から恩恵 *tabarruk* のヒルカを得た後、様々なスーフィーと接触し、1266-1267年頃にはムフィッディーン・アフマドから発心 *irāda* のヒルカを与えられ、スーフィズムに親しんでいた⁵⁹⁾。クトゥブッディーンは、前

55) アフシャルの挙げている根拠は、*Akhbār/Afshār*: 10.

56) *Majma'*: v.3. 440. イブヌル・フワティについては、Rosenthal 1979; Melville 1998 参照。

57) *Ḥabīb*: v.3. 116; *Ulamā'*: 220.

58) 彼については、*Ulamā'*: 219-228; *Majma'*: v.3. 440-441; *Rawḍāt*: 324-330; *Durar*: v.6. 99-100; *Nujūm*; v.9. 213; *Shāfi'īya*: v. 10. 386; *Abū al-Fiḍā*: v. 4. 63; *Ūljāyātū*: 118-120; *Qurashī*: v.3. 243-244; *Faṣīḥī*: v.3. 18; *Fārs-nāma*: 1148-50; *Bughuya*: 282; Bakar 1998: 227-262; Humā'ī 1996; Iqbāl 1932; Mishkāt 2006: 35-46; Minuwi 1969: 165-205; Mudarris Raḍawī 1991: 240-247; Naṣr 1996; Qurbānī 1968; Ṣafā 1987: 1227-1230; Mīr 1970; *idem.* 1976; Wiedemann 1986; Walbridge 1992a; Yūsifi-yi Rād 2007, スーフィズムについては、Walbridge 1992b; Anwārī 2005; 関 1983 等を参照。

59) Walbridge によると、ムフィッディーン・アフマドはナジュムッディーン・クブラーの門人であった *Najm al-Dīn 'Alī b. Abū al-Ma'ālī* の子で弟子であった (Walbridge 1992a: 13; *idem.* 1999: 323-34)。

節で指摘した『モンゴルの諸情報』の著者像に合致する側面を備えていたと言えよう。

『モンゴルの諸情報』の内容のうち、特に1256年から始まるフレグの遠征以降の記述には、微細にわたる情景描写や会話文が含まれ、他の史料には見られない情報や『集史』にのみ確認できる情報が散見される。また、例えば1265年にフレグが死去し、アバガが後継者に選ばれ即位するまでの過程、そして667(1268.9-1269.8)年のフレグがモンゴル本土に残して来た家族のホラーサーン地方への到着に関する記事には、『集史』とは若干異なる情報や『集史』には見られないフレグ家王族にまつわる情報が含まれており、当時、著者がハンの宮廷に近い立場にあったことが窺われる。

その一方で、『モンゴルの諸情報』のアバガ治世の叙述は相対的に情報量が少なく、アバガの即位からフレグの家族到着までの数年間に関する記録が存在しない。また、フレグの家族がモンゴル本土から到着し、アバガがホラーサーン地方で彼らを出迎えたのは、『集史』によると少なくとも『モンゴルの諸情報』の示す時期より半年以上遡る1268年2月のことであった。このフレグの家族の到着については両史料以外に同時期の記録がなく、どちらの記述が正しいのかは判断できないが、両史料の記述の年代の不一致は珍しいことである。

さらに、同じく『モンゴルの諸情報』のアバガ治世の記述には、1268年から9年間程の間の記録がなく、その次の記事はエジプトからシリア一帯を版図としたマムルーク朝の

スルターン、バイバルス(r. 1260-77)による675/1276-77年のルーム侵攻とそれに対するアバガのルーム進軍である。その後、その「翌年」の出来事として、モンケ・テムルのシリア進軍と敗走、またその「同年」の冬のこととして、アバガのバグダード滞在、そして当時バグダードの支配を委ねられていたアターマリク・ジュワイニーに着服の嫌疑がかけられ、税収の取立てや取調べが行われたことが述べられている(表1-2参照)。

しかし、他の史料によると、アバガがモンケ・テムルの軍を含む大軍をシリア遠征に派遣したのは1280年夏であり、シリア方面に親征したのは、『モンゴルの諸情報』にあるようにルーム進軍の翌年1278年のことではなく、1281年10月のことであった。この10月末にモンケ・テムルの軍隊がマムルーク朝の軍隊と対戦して敗走し、この年の冬、アバガは翌春のシリア進軍のためにバグダードに滞在した⁶⁰⁾。この時、バグダードではアターマリク・ジュワイニーに対する取調べが行われていたが、『モンゴルの諸情報』によると、その事件は、一年前にザンジャーンで彼を敵視していたマジドゥルムルク・ヤズディー Majd al-Mulk Yazdi⁶¹⁾ がアターマリクの着服容疑をアバガに直訴したために起きた。この直訴は『モンゴルの諸情報』には、『集史』同様、1281年春のことであったと記されている⁶²⁾。『モンゴルの諸情報』の表記では、1281年に起きたアバガのシリア進軍とモンケ・テムルの敗走が675/1276-77年の翌年に起きたことであるように解釈されるが、実際にはその間には約4年間の時間の隔

60) モンケ・テムルの進軍と敗走については、*Jāmi' / Rawshan*: 1116-1117; *Waṣṣāf*: 95-97; Amitai-Preiss 1995: 183-201, またバグダードの年代記 *Hawādith*: 412, 415: 参照。アバガがバグダードに滞在した冬とアラウウディーンに対する税収の取立てについては、*Jāmi' / Rawshan*: 1117; *Waṣṣāf*: 103-104; *Hawādith*: 415-416。

61) 彼の父はヤズドのアタベク家に仕えた官僚であった。彼自身は一時、イスファハーンでシャムスディーン・ジュワイニーの子バハーウディーンに近侍しており、その後、シャムスディーンのもとに移った。シャムスディーンは彼にグルジスターンの人口調査やルーム地方のスィヴァスの知事職を任せしたが、その後は彼を信用せず距離を置いていた (*Jāmi' / Rawshan*: 1110-11)。やがてマジドゥルムルクはジュワイニー兄弟の糾弾を開始した。

62) *Akhbār / Afshār*: 50。

たりが存在するのである。著者が「翌年」の出来事を後で補足する予定でこのように記載していたという可能性も考えられるが、他の部分に比べ記録内容の年代が非常に飛んでいることに変わりない。

総括すると、相対的にアバガ治世の『モンゴルの諸情報』の記録は情報量が少なく、アバガの即位とルーム進軍以外の出来事の年代が『集史』や他の史料の記載とは異なり、不明瞭である。

続けて、『モンゴルの諸情報』のアフマドの治世 (r. 1282.5-1284.8) の記録を見てみよう (表 1-3 参照)。まず、1282 年 5 月のアフマド即位の記事に続けて、681/1282 年にアフマドが弟コンコルタイをルームに任命したことが記載されている。そしてコンコルタイについて、『集史』には記されていないが、ルームで圧制を行ったと伝えている。『モンゴルの諸情報』によると、アフマドがコンコルタイを問責し、召還したのはこの出来事のためであった。その後、コンコルタイがアフマドの甥アルグンと共謀し反乱を計画したため、1284 年 1 月に処刑されたという記事が続く。『モンゴルの諸情報』には、『集史』に比べ、コンコルタイの言動や彼のアミール達に対する裁定の様子が具体的に記載されている。

その一方で、1282 年から 1284 年までの他の事件の記録はない (表 1-3 アフマド治世 1 参照)。コンコルタイ処刑の記事の後には、『集史』同様に、半年にわたるアフマドの軍隊のアルグン勢力に対する進軍と対戦、そしてアミール達の裏切りによるアフマドの敗走、アルグンによるアフマドの処刑 (1284.8)、アルグンの即位までの日々の出来事が詳細に述べられている。『モンゴルの諸情報』のアフマド治世の記録中には『集史』には見られない情報も存在するが、主にアフマドの動向が述べられており、アルグンの勢力の行動は記

載が少ない。それに対し『集史』にはアフマドとアルグン両方の行動が記録されている。

また注目すべき点は、アルグン達の軍隊に追われたアフマドとジュワイニーの兄弟で、アフマドの宰相であったシャムスッディーン・ムハンマド・ジュワイニー Shams al-Dīn Muḥammad Juwaynī (k. 1284. 10) が逃亡の道中で別れたというくだりで、二人の冥福を祈る祈願句が挿入されていることである。「フワージャ・サーヒブ・ディーワーンはアフマドと別れた。そして最早一緒に落ち合うことはなかった一神が彼ら二人に恵みを垂れ給いますように raḥima-hum allāh」⁶³⁾。この一ヵ月後には、アフマドはアルグン達により捕えられて処刑され、一度は逃げ延びたシャムスッディーンも連行された後に同様に殺害され、『モンゴルの諸情報』完成時には、故人となっていた。このような祈願句の挿入は一般的なことではあるが、『モンゴルの諸情報』では他の登場人物の死亡記事には祈願句は挿入されていない。末尾に、新ハンであるアルグンの治世の繁栄を願う祈願句が記されているのみである⁶⁴⁾。二人に対する祈願句を書いた人物は、彼らの死に対して特に思い入れを感じていたようである。

このような『モンゴルの諸情報』の叙述傾向より、著者が一個人であり、自身の見聞に基づき記録を残したと想定した場合、年代が正確で、情報が比較的詳細なフレグ治世やアフマド治世の 1284 年頃には、著者はハンの動向や様々な出来事の詳細を知ることが可能である宮廷やアゼルバイジャン一帯に滞在していた、または宮廷関係者と交流があったと考えられる。それに対しアバガ治世やアフマド治世の初期に関する『モンゴルの諸情報』の記録は少なく、著者は、この時期は常時イルハン国中枢における出来事を把握していたわけではなく、宮廷やその付近のアゼルバイジャン地方には居なかった可能性がある。

63) *Akhbār/Afshār*: 64.

64) 『モンゴル史』はアルグン即位の記述とアルグンの治世に対する祝福で終わる (*Akhbār/Afshār*: 65)。

また『モンゴルの諸情報』の中で記述が少ない時期でも、ルーム地方で起きた出来事の記録は比較的詳細である(表1-3参照)。アバガ治世のマムルーク朝のスルターン、バイバルスによるルーム進軍、イルハン国ルーム駐屯軍のアミール達の戦死、アバガによるルーム出兵の経緯は他の史料とほぼ一致する。特にアフマド治世にルームに駐屯していた異母弟コンコルタイのルームにおける圧制の記述は、マムルーク朝のスルターン、カラーウーンのアフマドへの返書に記載されている非難の内容と一致し⁶⁵⁾、アフマドによるコンコルタイ問責の原因になったと考えられる。同様に、コンコルタイとアルグンがアフマドに対する反乱を計画した事件についても、コンコルタイのアフマドに対する反抗的な言動や彼のアミールによるアフマドの宿営の偵察、彼らに対する審問や処刑の経緯等、『集史』には見られない情報が記載され、アフマドがコンコルタイを処刑した理由がより明白に述べられている。著者はルームと何らかの関わりを持ち、同地域の状況を知っており、コンコルタイ処刑の際にはアフマドの宿営、またはその付近に居合わせた可能性がある。

クトゥブディーンはシーラーズを離れた後に各地を渡り歩いたが、その年代と訪れた地域については様々な情報が伝えられており、相互に矛盾する場合もあるので必ずしも明確ではない。例えば、彼は1259-1260年にマラーガに移る前に、カズウィーンで学者

ナジュムディーン・カズウィーニー Najm al-Dīn Kātibī Qazwīnī (d. 1276) に師事しており、トゥースィーがカズウィーンを訪れた際に、クトゥブディーンを弟子としたという説も存在する⁶⁶⁾。マラーガでトゥースィーに師事した後は、先述のようにトゥースィーと共にフレグのもとを訪れたことがあった⁶⁷⁾。また、宰相シャムスディーン・ジュワイニーがナジュムディーン・カズウィーニーにホラーサーン地方ジュワインのマドラサでの指導を委託した際には、クトゥブディーンも同行し補佐したと言われている。その時期については、後述するトゥースィーのホラーサーンへの旅に同行した際に、途中でジュワインに向かったという見解と、それ以前に、一時、アゼルバイジャンを離れてジュワインに滞在したが、再びアゼルバイジャンに戻ったという解釈が存在する⁶⁸⁾。

ナスィールディーン・トゥースィーは、2代アバガ・ハン治世の665/1266-67年に、ホラーサーン、クヒスターン地方に書物の収集の旅に出て、667/1268-1269年にマラーガに帰還した⁶⁹⁾。この時、クトゥブディーンも同行したが、ホラーサーンから単独でイラク・アジャム地方の都市(イスファハーンやカズウィーン)、また667年以前にバグダードに到ったのではないかとされている⁷⁰⁾。前述のアッサラーミーによると、クトゥブディーンは、バグダードで当時のイルハンの宰相シャムスディーン・ジュワイニー

65) Pfeiffer 2006b: 178-183. Pfeiffer は、アフマドによるコンコルタイ処刑の原因がカラーウーンによる非難とアルグンと共にアフマド打倒を計画していたことにあった可能性を指摘している。

66) *Rawḍāt*: v. 1. 325; Taqīmīr 1976: 6-7; Mudarris Raḍawī 1991: 227, 240.

67) *Ḥabīb*: v.3. 116. 実際はアバガの治世のことであり、フレグと混同した記録と解釈する意見もある(Walbridge 1992a: 14)。

68) *ʿUlamāʾ*: 222. トゥースィーの旅以後という考えと(Mīnuwī 1969: 169; Mudarris Raḍawī 1991: 227; Walbridge 1992: 12)、旅の途中という解釈がある(Mudarris Raḍawī 1991: 227, 241; Taqīmīr 1976: 8)。

69) *Majmaʾ*: v.1. 421.

70) イスファハーン滞在については、Taqīmīr 1976: 9-10; Mīnuwī 1969: 167, 169, 173; Mishkāt 2006: 44, 58; Taqīmīr 1976: 10、カズウィーンについては Mīnuwī 1969: 169. バグダードについては、*ʿUlamāʾ*: 220; Mīnuwī 1969: 167; Mudarris Raḍawī 1991: 241; Taqīmīr 1976: 9-11; Walbridge 1992a: 12; Mishkāt 2006: 44-45.

に厚遇され、その後、フレグ・ハンやアバガ・ハンと面識を得た⁷¹⁾。また、1274年6月に亡くなったトゥースィーの病床を訪れたという記録も残っている⁷²⁾。

これと前後して、彼はルーム地方のコンヤに向かった。ルームで、神秘主義詩人ジャラルッディーン・ムハンマド・ルーミー (d. 672/1273) に会ったという伝承やサドゥルッディーン・クーナウィー (d. 673/1274) に師事したという記録があるため、1273-1274年以前にルームを訪れていたようである⁷³⁾。やがてクーナウィーの後継として、ルーム地方東端の都市スィヴァス及びマラトゥヤのカーディー (法官) に任じられ、スィヴァスに滞在した⁷⁴⁾。その後、アバガのもとに戻ったという記録があり、アバガが亡くなった時期には彼の宮廷にいたと考えられている⁷⁵⁾。

クトゥブディーンは3代アフマド治世の1282年8月には宮廷に居り、宰相シャムスディーン達の決定により、カイロのマムルーク朝スルターン、カラーウン (r. 1279-1290) のもとに書簡を届ける使節団の1人としてイランを離れた。そして、1282年11-12月にカラーウンに謁見し、また彼の念願であったイブン・スィーナーの『医学典範』*Kullīyyāt al-qānūn* に関する書物を集め、1283年初春にタブリーズのアフマドの

宮廷に帰還した。そして1283年中にルームで『医学典範』の注釈の執筆を開始したと言われている⁷⁶⁾。その後はスィヴァスに居たが、1286年にはコンヤに移っており⁷⁷⁾、『モンゴルの諸情報』を含む写本集成を作成した。

彼はルームに滞在していた時期にも、度々、マラーガやタブリーズ、ハン宮廷を訪れていた。そして4代アルグン (r. 1284-91) に引き立てられ⁷⁸⁾、遅くとも1290年代にタブリーズに居住するようになった。『集史』には、彼が1289年9月にアルグンのもとを訪れ、彼と直接対面した記録が残っている⁷⁹⁾。8代オルジェイト治世の1306年には一時的に西ギーラーンに逗留したようであるが⁸⁰⁾、その後タブリーズに戻り、1311年2月7日に死去した。

上述した『モンゴルの諸情報』の各時期に関する記録の分量の推移とクトゥブディーンが移動した時期と地域を比較してみると、『モンゴルの諸情報』にイルハン国中枢部の出来事に関する記載がない時期は、クトゥブディーンが地方に滞在していたと考えられる期間やマムルーク朝に使節として出向き不在であった時期とほぼ重なる (表2参照)。すなわち、1268年頃にフレグの家族がホラーサーンに到着した際には、彼は同地域周辺に滞在していた可能性がある。1277年のバイ

71) *‘Ulamā’*: 220, 222.

72) *‘Ulamā’*: 220; Mudarris 1991: 241-242; Taqīmīr 1976: 51; Mīnuwī 1969: 168.

73) ルーム移動については (*‘Ulamā’*: 220; Taqīmīr 1976: 9; Mīnuwī 1969: 167-168; Mishkāt 2006: 45)。ルーミーやクーナウィーとの出会いについては (*Rawḍāt*: v.1. 325-6; Mīnuwī 1969: 170; Mishkāt 2006: 45; Walbridge: 14)。

74) *Majma’*: v.3. 440; *‘Ulamā’*: 222. 任命した人物は、ルームの支配者ムーヌディーン・バルワナ (d. 1277) という解釈 (*‘Ulamā’*: 220; Mishkāt 2006: 45; Taqīmīr 1976: 11) と宰相シャムスディーン・ジュワイニーという説がある (*‘Ulamā’*: 222; Mudarris Raḍawī 1991: 242; Mīnuwī 1969: 171; 関 1983: 81)。また、その実務はクトゥブディーン代理により遂行され、彼自身は指導や文筆作業を行っていたという (*Nujūm*: v.9. 213; Walbridge 1992a: 15)。

75) *‘Ulamā’*: 222. 恐らくアバガ死去の際に宮廷に滞在 (Walbridge 1992a: 15)。

76) エジプトへの使節派遣については Pfeiffer 2006b, Melville 2009 にこれまでの研究や関係史料がまとめられている。Mīnuwī 1969: 171; Walbridge 1992a: 16-17.

77) *Majma’*: v.3. 440; Mudarris Raḍawī 1991: 242. コンヤでの執筆については、Walbridge 1992a: 16.

78) *Durar*: v.6. 99.

79) アルグンのもとを訪れ、イラン西方・北方の海や沿岸、そしてルームの地理について語った (*Ĵāmi’/Rawshan*: 1178)。

80) Walbridge 1992a: 22-23.

バルスのルーム侵攻や1282年にコンコルタイがアフマドによりルームに任命された際には、やはりルームに滞在していた可能性が高い。同様に、彼は、宰相シャムスッディーン・ジュワイニーと親交があり、シャムスッディーンやイスファハーンの管理に任命されていたシャムスッディーンの子、バハーウッディーンに著書を献呈したこともあり、ジュワイニー家との交流を維持していた⁸¹⁾。クトゥブッディーンはジュワイニー兄弟の糾弾に関する情報や事態の推移に関心を寄せていたはずである。それに加え、クトゥブッディーンは、アフマド治世には、シャムスッディーンとアフマドに取り立てられて、使節としてマムルーク朝に派遣された。クトゥブッディーンには、アフマドとアルグンの対立について記録を残す際に、アルグン達により処刑された、かつての主君アフマドとシャムスッディーンの記事に冥福の祈願句を添える動機はあっただろう。

これらの状況を踏まえると、クトゥブッディーン自身が『モンゴルの諸情報』の著者であり、間接的な伝聞情報やフレグの治世以降に関する自らの見聞に基づき執筆を行なった可能性を一つの案としてここで提示しておくことは決して無意味ではないと考えられる。クトゥブッディーンがモンゴルとの関わりがなく、またイルハン国中央に不在で、ハンや宮廷関係者との接触がなかった時期の情報を、聴き取りや何らかの情報源により収集し、それに自らの見聞を合わせて一つにまとめたとすれば、このように『モンゴルの諸情報』の伝える情報の精度や詳しさがそれぞれ均等でないのは自然なことである。

クトゥブッディーンは『モンゴルの諸情報』の写本の末尾には典拠を明記していないが、同じ写本集成に含まれている他の幾つか

の諸作品の末尾には、作品名、自分の名と書写時期や書写した場所等を記している。また、それらの作品の書写時に、底本とした写本が著者自筆本であったことや自分が部分的に修正を行ったことなども付記している⁸²⁾ (ただ、各所に引用された詩には必ずしも詩人の名を明記してはおらず、アリストレスの言葉等の断片的な覚書には特に典拠を記していない)。クトゥブッディーンがこのように底本に関する情報を作成した写本に記録する習慣を持っていたことを踏まえると、『モンゴルの諸情報』の原本が、たとえ未完成稿であったとしても、一著者による一つの独立した記録であったとすれば、彼は書写時に著者と底本に関する情報を明記したはずである。複数の典拠があった場合にもそのように記しただろう。このように彼が『モンゴルの諸情報』の典拠を何ら記載しなかったということもまた、彼自身がこの記録の著者であり、様々な情報源や自らの記憶に基づいて執筆したという可能性を後押しはしている。

また、フレグによるカリフ殺害の日付が空白のまま残されていること、先述したアバガ治世に関する記録の極端な少なさやアバガのシリア進軍の年代混乱⁸³⁾は、『モンゴルの諸情報』が草稿段階にあり、空白や混乱部分は後で加筆される予定であったと考えれば、自然なことではある。同様に、アフマド治世の記録に数箇所存在する単純な曜日と月の誤記⁸⁴⁾も、著者は気が付けば修正したはずであり、やはりこの記録が厳密な校正を経ておらず、完成稿ではなかったことを示していると考えるのが妥当であろう。ただ、『モンゴルの諸情報』にはトゥーサーやクトゥブッディーンに関する記録は全くなく、現在の状況では著者を断定することは困難である。次に『モンゴルの諸情報』の典拠や他の史料と

81) Walbridge 1992a: 16; Pourjavadi and Schmidtke 2009: 16; Minuwi 1969: 195.

82) *Akhbār/Afshār*: 6-7.

83) *Akhbār/Afshār*: 34, 48.

84) *Akhbār/Afshār*: 57, 61-62.

の関係について考察してみることにする。

2. 『モンゴルの諸情報』とそれ以前に 執筆された諸史料の関係

2-1. 『モンゴルの諸情報』以前に執筆された 主な諸史料

先述したように、『モンゴルの諸情報』には、1203年から1284年までの出来事が記録されている。本節では、『モンゴルの諸情報』以前、または同時期に執筆された諸史料にも確認できる1203年のチンギス・ハンの「バルジュナの誓い」のエピソードから1258年のフレグによるバグダード征服までの『モンゴルの諸情報』の内容について、他の史料との情報の関係性を検討したい。比較対照する主な史料は、『世界征服者の歴史』と『バグダード陥落の記録』である。本稿の性質上、『モンゴルの諸情報』の完成以降に作成された様々な現存史料、関連文献を参照することは控えるが、必要に応じて上述の2史料以外の諸史料も引用する。

『世界征服者の歴史』の著者、アターマリク・ムハンマド・ジュワイニー (1226-1283)⁸⁵⁾ は、阿母河等処行尚書省に父の代から出仕し始めた家系の出身で、1343年頃から出仕し、グユク・ハンの治世の1246-1247年とモンケ・カーンの治世の1252-1253年頃に、二度、モンゴル高原のカーンの宮廷を訪れた経験があった。フレグのイラン到着後は、阿母河等処行尚書省の長官アルグン・アカの命令によりフレグに随行し、アッパース朝カリフ政権征服後の1259年にフレグによりバグダードの管理を任せられ、宰相に任命された弟シャムスッディーンと共にフレグ家に

仕えた。その後2代アバガ治世に着服の疑いで糾弾され、3代アフマド治世に復職したものの死去した。

『集史』は14世紀初頭にフレグ家7代ガザン・ハンの要望により編纂され、最終的に彼の弟8代オルジェイトに献呈された公的なイルハン国史書である。それに対し、アターマリク・ジュワイニーは、モンケ・カーン即位式参列のためモンゴル本土を訪れていた1252年5月から1253年9月頃、友人達の勧めにより、特に当時のカーンであったモンケの功績を不朽のものとするためにカーンの宮廷のあるカラコルムで『世界征服者の歴史』の執筆を開始した⁸⁶⁾。友人達の勧めというきっかけは当時の著書執筆動機の常套句ではあるが、『集史』の編纂がガザンの命令により開始されたことに比べれば、ジュワイニーは、モンケ・カーンにより正式に執筆を要請されたというわけではなく、彼の執筆動機は比較的公的なものではなかったようである。ただ、彼が執筆に際し、当時のカーンであったモンケの名を挙げていることは注意すべきだろう。

『世界征服者の歴史』のモンゴルに関する記述は、第1部の1203年春、チンギス・ハンのバルジュナの泉での宿営の記録から始まり、第3部末尾の1256年末のフレグ軍によるニザール派教主居城攻略の記事で終えられている。ただ、第2部に1259年9月、シリア遠征準備中のフレグの様子が記されており、また1260年の出来事への言及が複数確認されるので、少なくともその頃まで執筆は継続されていた⁸⁷⁾。1260年の初めには、シリア遠征中のフレグのもとにモンケ・カーン

85) アターマリク・ジュワイニーと『世界征服者の歴史』については、Barthold[Boyle] 1965; Lane 2005; Boyle 1997: xxxvii-xxlvii; Melville 2008; Lane 2009.

86) *Jahāngushā*: v.1. 2-3, 7-8; Melville 2008; Lane 2009. ジュワイニーは断れぬ友人達の勧めにより当時のカーンの功績を永久に伝えるために執筆を開始しており、Melvilleは、これを an imperial commission であると解釈している。

87) ジュワイニーは同書で自らのバグダードでの政務に言及しており (*Jahāngushā*: v.1. 25), Boyle は、彼がその着任直後の1260年、もしくはその直後に執筆をやめたと考察している (Boyle 1997: xxxvii; Barthold-[Boyle] 1965)。

の死(1259.8)を確認した使節が帰還し、フレグは6月にイラン北西部に戻り、次兄クビライと弟アrik・ブケのカーン位継承の対立に「心痛していた」⁸⁸⁾。『集史』によると、フレグはこの後、1260年冬以降に、クビライにより徐々にイラン支配を承認された⁸⁹⁾。『世界征服者の歴史』のフレグ西征の記事では、フレグの称号として、それ以前の皇子 *pādshāhzāda* に加えて、帝王 *pādshāh* が多用されており⁹⁰⁾、この部分の執筆時点ではフレグがイランの「帝王」であるという認識が形成されつつあったと考えられる。

『世界征服者の歴史』は、フレグのイランと遠征軍に対する支配権が確立してゆく過渡期に執筆されており、『集史』に比べ、フレグの立場について同時代の実態に近い情報を伝えていると考えられる⁹¹⁾。本書がフレグ家王族やイルハン国の宮廷関係者に献呈されるために起筆されたのではなく、恐らくはフレグの西征中にも草稿が書き進められ、その情報が主に著者の見聞に基づいている点⁹²⁾は本書の同時代史料としての価値を高めている。また、ジュワイニーは当然、自らが仕えたフレグに対する賛辞を記しているが、彼の元来の執筆目的はフレグに西征を命じたモンケ・カーンの功績の記録であった。そのため、『世界征服者の歴史』では、チンギス・ハンと彼の後継者達、そしてチンギス・ハン家を

代表して西征に従事したフレグが一樣に称賛されており、フレグ家の宗主に献呈された『集史』とは一線を画する。

もう一つの史料、『バグダード陥落の記録』は、フレグとアバガの2代にわたり仕えた学者ナスィールッディーン・トゥースィー⁹³⁾の作と伝えられている。彼はフレグ軍による征服の際、ニザール派の教主の居城に滞在しており、その陥落後はフレグに随行し、バグダード征服の際にフレグ軍の使節として活動した。この記録は、すでに13世紀末には当時の書物に引用されていた。例えば、前述のバルヘブラエウスのアラビア語年代記中には、本記録がアラビア語に翻訳されて引用されており⁹⁴⁾、アダムからアッパース朝滅亡までの史書である『ニークパーイ史』*Tārīkh-i Nīk-pāy*⁹⁵⁾ やキルマーン地方のカラキタイ政権クトルグハン朝に関する史書『王の歴史』*Tārīkh-i shāhi*⁹⁶⁾ で全文が引用されている。このように13世紀末頃、史書執筆時によく参照されていた記録である。

また、本節では、これらの2史料と『集史』の他に658/1259-60年頃にインドのデリーで執筆された『ナースィル史話』*Ṭabaqāt-i Nāsiri*⁹⁷⁾、上述のナスィールッディーン・トゥースィーにより編纂された『イルハン天文表』*Ẓij-i Ilkhāni*の序文⁹⁸⁾等の記述にも随時言及する。

88) *Jāmi'/Rawshan*: 1028.

89) *Jāmi'/Rawshan*: 877; 杉山 1982: 305-9; 細かい経緯については、高木 2009: 142.

90) *Jahāngushā*: v.2. 44; v.3. 99 以降.

91) かつて『世界征服者の歴史』のモンゴル史史料としての評価は低く、モンゴルや特定の王家を晶貞する傾向が指摘されたが (Barthold 1968: 44; Ayalon 1971: 133), その後再評価された (Jackson 1978: 113-8; Lane 2003: 4; Melville 2008; Lane 2009).

92) Boyle 1997: xxxvii-viii.

93) 彼に関する研究は非常に多いが、例えば、黒柳 1966; Daiber and Ragep 2000.

94) *Jahāngushā*: v.3. 279; *Mukhtaṣar*: 269-272; Wickens 1962: 28

95) *Nīk-pāy*: 460b-462b; *Jahāngushā*: v. 3. kāf; Boyle 1961; Wickens 1962.

96) *Shāhi*: 100.

97) Bazmee Ansari 1965. ミンハジュッディーン・ジューズジャーニーにより、インドのデリーで658/1259-60年頃に書き終えられた。チンギス・ハンの父親からフレグ治世末までのモンゴル史を含む。主に伝聞情報に基づいており、東方地域で執筆されたため、中央アジアからアフガニスタン、イラン東部におけるモンゴルの動向に関する独自の情報を持つ。

98) 『イルハン天文表』の序文二系統のうち、短い序文はカズウィーニーにより校訂され (*Ẓij/Qazwini*), 長い序文の一部はボイルが校訂し、両方の英訳・解説を行なった (*Ẓij/Boyle*)。

2.2. 『モンゴルの諸情報』のチンギス・ハンからモンケ・カーンの治世に関する記述

前節で明らかになったように、『モンゴルの諸情報』のフレグがイランに到着する以前の部分の記述には、それ以前に著述された『世界征服者の歴史』等の諸史料とは一致しない明らかな誤伝が存在する。つまり少なくともそれらの部分に関しては、イラン出身であった『モンゴルの諸情報』の著者が『世界征服者の歴史』等を参照せずに、別の情報源により間接的に情報を得たと考えられる。そこで本節では、『モンゴルの諸情報』の他の記録についても、他の諸史料と対照してみる。まず、『モンゴルの諸情報』のチンギス・ハンからモンケ・カーン治世に関係する複数の記述を取り上げ、『モンゴルの諸情報』以前に書かれた『世界征服者の歴史』、『ナーシル史話』、『イルハン天文表』序文の情報との相関性を検討する。最初に前節で述べたバルジュナの誓いに関する『モンゴルの諸情報』の記述を見てみよう。

Sonfū・バハードルの子 Qablāの子 Yiskāの子、チンギス・ハンの勃興は599/1203年某月であった。……彼に関する事跡の始まりは、ヒタイの方にあるバルジュナの水無河においてであった。そこで、数日間何も食べるものを見つけれなかった。彼の軍隊のある者が荒野の雀を矢で射て、焼き、彼の御前にもたらし。彼は70に分けるようにおっしゃり、その一部分を彼が取った。そこには70人以上は居らず、その正しき配分により、人々は皆、彼の従者、追

従者になり、彼に対して命を預けた⁹⁹⁾。

まず、チンギス・ハンの父祖の系譜は、管見の限りでは『集史』以前の西方の史書には伝えられていない。『集史』によると、チンギスの6代前までの父祖は、父イエスゲイ Yiskāy から遡ると、バルタン Bartān-カブル Qabl-トンビナイ Tūmbina-バイ・シンコル Bāy Sinkqūr である¹⁰⁰⁾。『モンゴルの諸情報』の Sinfū・バハードルは『集史』のバイ・シンコル、Qablāはカブル、Yiskāはイエスゲイにそれぞれ相当すると考えられる。『モンゴルの諸情報』は一代おきの系譜のみを伝えているが、人名は『集史』の情報と多少の転写の差異はあるものの共通している。著者は執筆当時としては比較的詳細なチンギス・ハンの父祖の系譜情報を持ち合わせていたのである。

さて、東西史料に見られる「バルジュナの誓い」¹⁰¹⁾は、基本的には、チンギスがケレイト部のオン・ハンとの戦いに敗れ、バルジュナという名の地に逃れて体勢を整え、わずかの家臣達と共にオン・ハンに勝利し、勢力を増したというエピソードである。チンギスが家臣達と共にバルジュナの泉、または川の水を飲み、誓い合ったというパターンや、ただ水を飲んだというパターンも伝えられている。このように様々なヴァリエントが存在し解釈には注意を要するため、ここでは『モンゴルの諸情報』と他の西方で書かれた諸史料の記述との相関性の有無を確認するに留める。

「バルジュナの誓い」を伝える初期の西方史料¹⁰²⁾には、チンギス達がバルジュナの水

99) *Akhbār/Afshār*: 19; *Akhbār/Mar'ashī*: 22b.

100) *Jāmi'/Rawshan*: 242-273. 人名の片仮名表記については、主に『元朝秘史』: 46-66.

101) チンギスのバルジュナにまつわる話は、『元朝秘史』、『聖武親征録』、『元史』等の東方史料にも見られる(『元朝秘史』: 200-202, 207-210; Cleaves 1956: 357-421; Stang 1985: 229-235)。吉田 1968も参照。

102) チンギスの情報を伝える最初期の西方史料にはバルジュナの誓いに関する記載は現れない。彼が東方出身であることを記した上で、中央アジア遠征の記録が述べられる場合が多い(*Kāmil*: 361-62; *Ibn al-'Amīd*: 129)。また、東方における金朝皇帝や諸部族の首領との関係に関する記載も見られる(*Sira*: 5-11)。

を飲んだ、または誓いを行なったという記述はない。『世界征服者の歴史』には、チンギスはオン・ハンから逃れて少数の家臣と共にバルジュナの泉にやってくる、その地でオン・ハンに勝利し、何度かの交戦を経て強大になったとある¹⁰³⁾。また、『ナースィル史話』では、相手がオン・ハンではなく金朝皇帝であるが、バルジュナの地に徐々に多くの人々が集まり、チンギスのもとに団結し勝利している¹⁰⁴⁾。一方、トゥーシーにより書かれた『イルハン天文表』の長い序文¹⁰⁵⁾によると、チンギスはオン・ハンの息子セングンから逃れて、バルジュナの川の畔で冬を越し、その後セングンと戦い勝利し、その地の大多数の人々を従わせた¹⁰⁶⁾。ちなみに『集史』は、チンギスはバルジュナの川の水を飲み、そこから移動してオン・ハンと戦い勝利し、ハンに即位したと伝える¹⁰⁷⁾。

『モンゴルの諸情報』では、チンギスの対戦相手の存在は言及されず、バルジュナという名の水無河で、飢えたチンギス達が水ではなく雀を分け合って食べることにより、彼と共にいた70人の軍がチンギスの従者となったエピソードとして表現されている。この箇所における他史料との情報の相関性はバルジュナという名の泉か河の存在とチンギスと家臣達の結束以外ほとんど確認されず、チンギスがハンに即位したという記述もない。『モンゴルの諸情報』のチンギスの系譜と「バルジュナの誓い」の記録の典拠は上述の諸史料

ではないようである。

次に、チンギスの後継者達について『モンゴルの諸情報』には、

チンギスの子供達のうち、人々の間で有名であった名高い4人の息子達がいた。チャガタイ・ハン、オゴデイ Hūktāy・ハン、トルイ・ハン、トゥーシー Tūshī・ハン。チャガタイは父の死後、それ程生きなかつた。彼¹⁰⁸⁾は、オゴデイを自分の存命中に、帝王としていた。自分の代理としていた。……その家系に、オゴデイ・カーンがいた。彼の死後はグユク・ハン。そしてグユクが亡くなると、話し合い kinkāj とバト・ハンの意思により、モンケ・カーンを帝王として即けた。そしてチャガタイとオゴデイの子孫たちはそのことに満足ではなかつた。反意を考え、モンケ・カーンに対して謀反を起こそうとした。彼は知り、正道と率直な思考によりそれを迎え、殺害、殴打、拘束などによりその報復を行った¹⁰⁹⁾。

と、記されている。『世界征服者の歴史』や『ナースィル史話』、『イルハン天文表』序文には、ジュチの名がトゥーシーと表記される例は存在するが、オゴデイの名は Üktāy, Uktāy と記されている。語頭の h- 音が音写された Hūktāy という表記は稀である¹¹⁰⁾。また、先に触れたように著者はチンギスの息子達の年齢順を誤解していたと推察される。

103) *Jahāngushā*: v. 1. 27.

104) *Nāsiri*: v.2. 99-101.

105) 『イルハン天文表』の古写本には2系統の序文が存在する (Boyle 1962)。

106) *Zij/Boyle*: 247-250.

107) *Jāmi'/Rawshan*: 393-395.

108) チャガタイの死の次の文の主語は明記されておらず、チャガタイが主語と解釈する場合、著者はチャガタイが弟オゴデイを自分の代理・後継者とみなしていたと考えられ、明らかにこの記述は他の史料とは異なり、誤伝である。一方、前後の文脈や他の史料の記述を踏まえると、チンギスが主語であるとみなすことは不可能ではなく、その場合はほぼ他の史料と一致する。

109) *Akhhār/Afshār*: 20.

110) トゥーシーについては、Golden 2002: 143-151 参照。中期モンゴル語のアラビア字音写においてモンゴル語の語頭の h- が表記される場合が存在する (齊藤 2003: 136)。同じ単語でも h- が表記される場合とされない場合があった。

そして、チャガタイが最初に死去したように説明されているが、『世界征服者の歴史』によると、彼はオゴデイの死の直後に亡くなった¹¹¹⁾。

一方、チンギス・ハンは生前にオゴデイを皇太子としており¹¹²⁾、オゴデイの死後は、グク・ハンが即位した。グクの死後、次のモンケ・カーンがバトの後ろ盾をうけて即位し、それに対し、オゴデイとチャガタイの子孫が叛意を示したことは『世界征服者の歴史』や『ナースィル史話』にも明記されていることである¹¹³⁾。このように『モンゴルの諸情報』のチンギスの後継者達に関する情報は、それ以前に執筆された諸史料と共通する部分もあるが、一致しない表記や記述が散見される。

最後に、前節で一部を引用したジュチ家に関する記述を確認する。

(チンギスは) トゥーシー・ハンをキプチャク¹¹⁴⁾とルーシとサクシーンとブルガールの諸地方に任じられ、そして彼の一族はその地で帝王とされた。最初に、コングランであった。彼の後、シバン・ハン。彼の後、バト・ハン。彼の後、ベルケ。彼の後、モンケ・テムル。彼の後、トダ・モンケ。彼は現在、すなわち 680/1281-82 年において帝王である¹¹⁵⁾。

ジュチの任命地として挙げられているキプチャク、ルーシ、サクシーン、ブルガールの諸地方は、当時のロシア、黒海北岸からヴォルガ（イティル）河流域一帯を包括する。チンギスの長子ジュチ（d. 1227）はもともとチンギスからアルタイ山脈の山麓、イルティ

シュ河上流域を遊牧地として与えられ、その後ウラル河方面まで領域を広げた。ヴォルガ以西、黒海北岸や北方のルーシがジュチ家の影響下に入ったのは、1236年からのジュチの次子バトの遠征以降であった¹¹⁶⁾。すなわち、ここで言及されているジュチの任命地はジュチ生前の範囲ではなく、バト以降の時代の掌握地域を含んでおり、後世の事実がジュチ生前に遡及されているわけである¹¹⁷⁾。また、ジュチ家の歴代宗主の説明は前節で明らかになったように、『世界征服者の歴史』や『ナースィル史話』とは異なっていた。著者は1256年以後、フレグのイラン到着後にモンゴルと接触を持つようになったと考えられるので、その当時の実態がジュチ生前のジュチ家領域の記述に反映されているのである。

少なくとも『モンゴルの諸情報』のモンケ治世までの箇所の内容については、著者が『世界征服者の歴史』等の既知の史料を典拠としたと考えることは難しく、何らかの異なる情報源や著者の時代の状況に基づいて執筆したとすることができるだろう。

2-3. 『モンゴルの諸情報』におけるフレグ西征の記述

次に、『モンゴルの諸情報』に見られるフレグ西征の記事のうち、特にモンゴル軍によるニザール派のギルドクーフ城包囲とバグダード征服時の進軍隊形の描写を、『世界征服者の歴史』や『バグダード陥落の記録』と比較する。なお、随時、『集史』も参照する。

モンゴル軍によるニザール派ギルドクーフ城包囲の情報は、最も詳細なニザール派征服の同時代史料である『世界征服者の歴史』には存在しないが、『モンゴルの諸情報』と『集

111) *Jahāngushā*: v.1. 210.

112) *Jāmi' / Rawshan*: 539, 578; *Jahāngushā*: v.1. 31; *Zīj / Qazwīnī*: 158.

113) *Jahāngushā*: v.3. 555-590; *Nāsiri*: v.2. 179-180.

114) *Khifchāq*. 類似した *Khifchākh* はアラビア語化した古い表記である *Boyle*: 183. n.12.

115) *Akhbār / Afshār*: 20.

116) 赤坂 2005: 209-210.

117) ジュチ家の遊牧地、影響力の及んだ地域の推移については、高木 2009: 9-12.

史』には記載されている。『モンゴルの諸情報』によると、1253年5月にフレグが軍隊をギルドクーフ城に送り込み、城は包囲された。そしてフレグ自らも城下に向かい、対戦した¹¹⁸⁾。しかし、『世界征服者の歴史』によると、1253年5月には、フレグはモンケから西征を命じられた直後で、モンゴル本土の自らの宿営に帰還したばかりで、西征には出立しておらず、明らかにギルドクーフ城包囲を行なうことは不可能であった。『集史』によると、この時期にイランに到着したのはモンケがフレグ軍の先鋒として派遣したアミール・キトブカの軍隊であった。『モンゴルの諸情報』にフレグの行為として説明されている内容は、『集史』にはすべてキトブカが行なったこととして記されている。

また、『世界征服者の歴史』の著者、アターマリック・ジュワイニーは、フレグの征服活動の際に同行していたので、同書にギルドクーフ城包囲の記録が存在しないのは、包囲がフレグにより実行されたのではないことを示している。やはり『集史』が伝えるように包囲はキトブカの軍により行われたのである。そのため、この点については『モンゴルの諸情報』の記載は誤りであり、『集史』の記述が正確である。そして、フレグとキトブカを混同していることより、『モンゴルの諸情報』の著者は、フレグのイラン到着以前と到着直後の動向を実見していたわけではなかったと考えられる。

『モンゴルの諸情報』と『バグダード陥落の記録』の内容を比較すると、基本的な出来事とその起きた時期は共通しているが、個々の出来事の細かい表記内容はほとんど一致していない。一方、『バグダード陥落の記録』と『集史』の内容は全体をとおして共通の情報が確認されるものの、『集史』には前者には見られない情報が見つけれられる。例えば、それぞれの史料に記載された1257年にバグ

ダードに進軍したモンゴル軍の隊形について、『バグダード陥落の記録』には次のようにある。

帝王(=フレグ)はハマダーンの境域から1257年10-11月に出発なさった。そして【1】スンジャク・ノヤンとバイジュ・ノヤンが先に、右翼としてイルビルへの道をシャフラズールとダーククの山々經由で直進し、【2】キトブカ・ノヤンとUnkiyā・ノヤンは左翼としてギリートとバヤートの方面から、そして【3】帝王は軍隊の中心でキルマーンシャーハーンとフルワーンの路へと出発なさった¹¹⁹⁾。

すなわちフレグが命じたバグダード進軍隊形は、モンゴルのアミール達が率いる下線部【1】の右翼と【2】の左翼、そして【3】のフレグの中軍から構成されていた。まず、右翼がクルディスタン北部のシャフラズールと山地を通り、ディヤール・バクル地方にあるイルビル經由で北西からバグダードへ、左翼はルリスタンとフーズィスタンに跨るギリートとバヤート、すなわち南から、フレグの中軍はクルディスタン南部のキルマーンシャーハーンとその西方のフルワーン經由で東からバグダードに行軍したのである。一方、『集史』には次のように記されている。

フレグはバグダードに向かうことを決心なさり命じた、ルームに遊牧地が定められていた(故) チョルマガンとバイジュ・ノヤンの軍隊は右翼としてイルビルの方からモスルに来てモスルの橋を渡り、バグダードの西側の定められた地点に下馬し、我々の諸旗(=フレグ中軍)が東方から到着したら、そちら側から来るように。そして王子達、ジュチの子シパンの子バラガイとジュチの子ボアルの子ミンカダルの子トタル、

118) *Akhbār/Afshār*: 25.

119) *Kayfiyat*: 282-283.

ジュチの子オルダの子クリとブカ・テムルとスンジャク・ノヤンは皆、(別の)右翼としてスニテイ・ノヤンの丘¹²⁰⁾からフレグ・ハンの方に来るように。キトブカ・ノヤンとクドスンとエレゲイは左翼としてルリスターンやギリート、フーズィスターンやバヤートの境域からオマーンの海岸まで達していた。……フレグはモンゴルがそれをコルと呼ぶところの中軍と共にキルマーンシャーハーンとフルワーンに向け出立した¹²¹⁾。

右翼軍の一部の構成と率いるアミール達の名や進軍経路上の地名が『バグダード陥落の記録』に比べ、より詳細であるが、破線部の内容は変わらない。『集史』と『バグダード陥落の記録』のこの箇所の内容が共通の典拠に基づいていたという可能性もあるが、前述のように『バグダード陥落の記録』は当時の史書によく引用されていたので、『集史』編纂時に『バグダード陥落の記録』が参照された可能性は高い。ただ、上述の『集史』の箇所を『バグダード陥落の記録』と比較したウィケنزは、軍隊の隊形がやや不明瞭であると述べている¹²²⁾。

まず、右翼はバイジュの軍隊とスンジャク達の軍隊という2つの軍から構成されていた。バイジュは当時、タマ軍¹²³⁾を率いてルーム地方に居たため、『集史』にあるように同地方からイルビル経由でモスルに向かった。そしてスンジャクの軍はキルマーンシャー近郊でフレグのもとに来た後¹²⁴⁾、『バグダード陥落の記録』の下線部【1】の右翼の進軍経路を進んでイルビルに向かったと考えられ

る。一方、左翼は『バグダード陥落の記録』にあるようにルリスターン、フーズィスターンからバグダードに向かったと推定されるが、キルマーン地方南方のオマーン湾まで軍隊が達していたという記述は、前軍隊の進軍経路からやや外れており、ウィケنزが指摘したように若干不明瞭である。

一方、『モンゴルの諸情報』にはアミール達に関する説明はなく、上述の右翼、左翼、中軍に相当すると考えられる各地方の軍隊が構成した3部隊の行軍経路が記されている。

655年10月(1257.10-11)に、フレグはバグダードを目指してハマダーンの地方から出発した。……そして諸軍隊をパルス地方からルーム地方まで、一度に、無限かつ無数の者がバグダードに向かうように準備していた。【1】パルスとキルマーンの軍隊はフーズィスターンとシューシュタル(=スーサ)から進軍させ、彼らの左翼はオマーンの海の海岸にまで達し、そして右翼はイラク(・アジャム)等の諸軍隊と連結するように。そして【2】ルームの軍隊はシャーム(=シリア)とディヤール・バクルの境域から出立した。彼らの左翼はアッラーンとアゼルバイジャンの諸軍隊に連結していた。そして一度に、諸地方からイラク・アラブに流れ込んだ。

地名に着目すると、些細なことであるが、『バグダード陥落の記録』と共通する地名が現れず、『集史』と一致する地名(下線部)が確認される。地方の軍隊について具体的な情報は記されていないが、【1】のパルス(=

120) スニテイはフレグの西征に従軍したアミール。

121) *Jāmi'/Rawshan*: 1008.

122) Wickens 1962: 31.

123) 1220年代前半のチンギスによる西征の後、モンゴル本土からイランに派遣された辺境駐屯軍。その初代総指揮官が Cholmagun で、この当時はバイジュが継いでいた。

124) *Jāmi'/Rawshan*: 1009. この第2の右翼は最終的にチグリス河を超えてバグダード西側に向かい、第1の右翼のバイジュ軍と合流しており(*Jāmi'/Rawshan*: 1010-11)、チンギスの中軍より北方ルートで進軍したと考えられる。

ファールス) とキルマーンの軍隊とは、フレグのバグダード遠征に従軍していた2地方の政権、すなわちファールスのサルグル朝とキルマーンのクトルグハン朝の軍隊を指し、『集史』のキトブカ達が率いる左翼軍の一部を構成していたと考えられる。

また、このファールスとキルマーンの軍隊の右翼が連結するイラク・アジャム等の軍隊は、イラン・アジャムの3地方、すなわちヤズドとルリスターン(すなわち大ルルと小ルル)の諸アタベク政権の軍隊をはじめとするイラク・アジャム地方から集結した諸兵に相当する¹²⁵⁾。行軍経路から比定すると、これらの軍隊はキトブカ・ノヤンやエレゲイ達が率いた左翼軍に相当し、『集史』の記述ではやや不明瞭であった「オマーンの海岸」まで達するという記述は、左翼軍の一部を構成したキルマーン地方の軍隊がその方面まで達していたことを指しているのだろう。

そして【2】のルームの軍隊は、先述のバイジュ率いるタマ軍等のルーム方面から進軍した右翼の軍隊であり、その「左翼」である別部隊「アッラーンとアゼルバイジャンの軍隊」とは、『集史』の右翼軍の別部隊、ジュチ家の王子達、ブカ・テムル、スンジャク達の率いた軍隊をはじめとして、その方面から従軍した軍隊を指していると考えられる。このように、『モンゴルの諸情報』のモンゴル軍隊形の説明には、『集史』に現れる地名が存在し、『集史』の情報がより明確になった。『集史』のバグダード遠征に関する記録の典拠の一つが『バグダード陥落の記録』であることは明白であるが、部分的に『モンゴルの諸情報』と共通する内容も含まれていることがわかった。

これまでの考察により、『モンゴルの諸情報』の著者は、『世界征服者の歴史』や『バグダード陥落の記録』、『イルハン天文表』の序文を直接は引用していないことが確認された。ただ、このことは同時代を生きた著者がこれらの書物に目を通したことがなかったことを意味しているわけではない。クトゥブディーンが著者であったかどうかは別として、彼はトゥースイーの弟子でありジュワイニー家と交流を持っており、これらの書物に目を通していた可能性が高い。

また、著者は、自ら望めば、『モンゴルの諸情報』の明らかな誤伝について、他の書物を参照して、修正や加筆を行うことは可能であったはずである。『モンゴルの諸情報』の原本は校正が行われる以前の段階の手稿であったようである。また、分量の割合に注目すると、『モンゴルの諸情報』の著者の執筆主眼は、モンゴルの過去の記録よりも、著者と同時代のイルハン国史の記録にあった。いづれにしても、『モンゴルの諸情報』のフレグのイラン到着までの内容は、『モンゴルの諸情報』以前に書かれた既知のペルシア語史料とは異なる情報源に基づきまとめられている。先述のように著者はフレグのイラン到着後、フレグの宮廷と接触を持つようになった人物であり、『モンゴルの諸情報』のフレグ治世後半の記録は、他に詳細な同時期の史料が知られていない現在の状況下において、貴重な史料である。

本節で確認したように、『モンゴルの諸情報』と『集史』に共通する情報には、『モンゴルの諸情報』以前の既知の史料には見られないものが存在する。そこで、次節ではこの2史料の情報の関係について考察したい。

125) フレグによるバグダード征服の際に、ファールスのサルグル朝からは5代アタベク、アブー・バクルの甥である後の8代アタベク、ムハンマド・シャーが参加し (*Waṣṣāfī*: 183), キルマーンのカタキタイ政権クトルグハン朝からは、『最高権威のための崇高の緒』(1316-17年執筆)によると、当時のスルターン、クトゥブディーン自ら従軍した (*Simṭ*: 35)。ヤズドのアタベクのバグダード遠征従軍については北川 1986: 122, 大ルルのアタベクについては北川 1988: 89 参照。小ルルのアタベクの従軍については『選史』に記されている (*Guzīda*: 557)。

3. 『モンゴルの諸情報』と『集史』の関係

3-1. 『集史』について

『集史』第1巻「モンゴル史」はイルハン国7代、ガザン・ハン (r. 1295-1304) の意志により、宰相ラシードゥッディーン達によって編纂された。ガザンはその完成前に死去し、ラシードゥッディーンは「モンゴル史」をガザンの弟8代オルジェイトに献呈し、オルジェイトはそれに加えて世界諸民族史の執筆を命じた。このように、『集史』は705/1305-6年には一旦完成したが、加筆されて、1309年までにラシードゥッディーン の著作集に収められた¹²⁶⁾。

すでに明らかにされているように、『集史』「フレグ・ハン紀」*Dāstān-i Hūlāgū Khān* の典拠の1つは、『世界征服者の歴史』である¹²⁷⁾。また、同じくすでに指摘されているように、『世界征服者の歴史』第3部のフレグのイラン進軍とニザール派教主居城攻略の記録は、『集史』「フレグ紀」の西征に関する記述の典拠となっている。また『世界征服者の歴史』第3部後半のイスマール派史のうち、モンゴル出現以降のニザール派の教主5代ジャラルッディーン・ハサン (r. 1210-21)、6代アラウッディーン・ムハンマド3世 (r. 1221-1255) と7代ルクヌッディーン・フルシャー (r. 1255-57) の治世の記録は、『集史』「イスマール派史」における各教主治世の記事の典拠とされている¹²⁸⁾。ただし、『集史』には、『世界征服者の歴史』には見られない様々な情報も存在し、他にも典拠や情報源があったことがわかる¹²⁹⁾。

オールセン T. Allsen は、ラシードゥッディーン自身の『集史』の典拠や情報源に関

する言及をまとめて、ペルシア語の他に、漢語、カシュミール語、ウイグル語、モンゴル語、アラビア語、その他の諸語の資料や情報提供者達が活用されたこと、他にも様々な書き手による、時には完結していない個々の史書 *tawārikh* や帳冊 *dafātir* が参照されたことを指摘している。また、7代オルジェイトの治世の史書であるジャマルッディーン・カーシャーニー著『オルジェイト史』*Tārikh-i Ūljāytū* が編年体構成で、日々のハンの動向と宮廷の出来事の記録であることに基づき、イルハン国にも宮廷日誌が存在したと推察している¹³⁰⁾。前節で確認したように、『モンゴルの諸情報』と『集史』の「モンゴル史」の内容には相関性があるため、次に、両書に共通する記録を比較対照する。

3-2. 『モンゴルの諸情報』と『集史』の内容の共通性

『モンゴルの諸情報』には、前後の文脈の大筋に直接には関係しない非常に具体的な細かいエピソードや、人数・距離・大きさなどを示す数量や分量の数値の記述が存在する。主題に直接関係のないエピソードはあらゆる史料に記載されるとは限らず、他の文献から引用された場合や他の文献に引用される場合に、執筆者の個人的な判断による恣意的な解釈の影響を比較的受けにくく、大きな変更を加えられることは少ないと考えられる。また、数値表現はすべての史料において等しく記述されるわけではなく、記述の典拠や引用された文献を比定する際の判断基準の一つとすることができる。そこで、『モンゴルの諸情報』のそのような記述のうち、『集史』「モンゴル史」の「フレグ紀」から「アフマド紀」までの記述と共通するものを両史料から抽出して

126) Morgan 1995, 日本における『集史』研究全般については、岩武 1997。

127) Boyle 1962: 133.

128) *Jahāngushā*: v.3. 241-278; *Jāmi'/Dānishpazhūh*: 177-195; 本田 1972: 167.

129) Boyle 1977; 本田 1972: 167; Daftary 1992.

130) Allsen 2001: 86-102.

みる。

まず、『世界征服者の歴史』には記載されていない、先述したギルドクーフ包囲の記録について、『モンゴルの諸情報』では、モンゴル軍が城の周囲に掘った大きな塹壕の構造が次のように説明されている。「城砦の周囲に大きな塹壕が掘られ、塹壕の後方に堅固な壁が作られ、壁の後ろに屯所が作られ、屯所の後方に、別の壁が作られ、その後ろに塹壕が掘られた。もし城砦の内部から誰かが出て来たり、または外側からその集団を目指した場合に、塹壕と壁が双方の障壁となるように」¹³¹⁾。この塹壕について、『集史』「フレグ紀」には「城砦の周囲に塹壕が掘られた。そしてその周囲に堅固な壁が建てられ、軍隊はその壁の背後に包囲網を敷き、そして軍隊の周囲には非常に深く高い別の壁と塹壕が作られた。軍隊がその間に安全に留まり、双方から往来できぬように」¹³²⁾と記されている。両史料の表現は異なるが、説明されている情景はほぼ一致しており、『集史』ではよりわかりやすく、二重の塹壕と壁の間に軍隊が駐営したことが記載されている。

また、このギルドクーフの籠城戦の際に、城内で熱病が流行し、城の人々はカズウィーン方面のマイムーン城に居た教主アラウッディーンに援軍を要請した。『モンゴルの諸情報』には、アラウッディーンは、「司令官ムカッダムッディーン・ムハンマド・ムバーリズが彼らを連れて行き、(城砦を)包囲している集団を突破するように、100人を付き添わせて送った。彼がその100人を連れて行った際、1人が塹壕に落ちて足を脱臼したが、その者も運ばれた。誰にも被害はなく、砦の上に行き、砦の守備は堅固になった」とある¹³³⁾。一方、『集史』によると、「かく

してその110人は包囲している集団を討ち、誰にも被害が及ばぬように超えた。1人が塹壕に落ちて、足を脱臼したが、彼は肩に担がれ、城砦に運ばれた。そしてギルドクーフの守備は再び堅固になった」¹³⁴⁾。両史料の記述には、100人と110人という若干の人数の差は存在するが、援軍の兵の1人が塹壕に落ちて負傷したものの、彼は砦に運ばれて、全員が無事に城内に到達したという事実が伝えられている。

その後、フレグがイランに到着すると、フレグが率いる本隊はニザール派のマイムーン城の攻略に向かった。教主ルクスディーンはモンゴルに服従し、砦を破壊することを承諾すると、フレグに通知した。しかし、その直後、突然、モンゴルのアミール達が城の付近に現れたため、城の人々は驚き、そのアミール達に使節を送った。『モンゴルの諸情報』には、

人がそのアミール達のもとに送られた、「我々は服従した。あなた達はどんな用で我々の地方に来たのか」と。彼らは言った「服従と団結が存立しているので、我々は牧地に来たのだ」。そしてフレグが彼らの地方の境域に到着した。そこから猛突進して彼らのもとに行った。もし、その夜、大雨でなければ、ルクスディーンは砦のふもとで捕えられていたかもしれない¹³⁵⁾。

とあり、一方、『集史』には次のように記されている。

フルシャーは彼らのもとに言伝を送った。「我々は服従して、砦の破壊に従事してい

131) *Akhhār/Afshār*: 25.

132) *Jāmi'/Rawshan*: 981.

133) *Akhhār/Afshār*: 25-26.

134) *Jāmi'/Rawshan*: 982.

135) *Akhhār/Afshār*: 28.

るのに、あなた方の到着の理由は何か」。彼らは言った「互いに団結しているので、我々は牧地に来たのだ」。そしてフレグ・ハンは659年10月10日にピーシュカラからターリカーン経由で出発し、突進して、彼らの地方に到着した。もしその夜、太雨でなければ、フルシャーは砦のふもとで捕えられていた¹³⁶⁾。

両史料の記述は基本的に一致している。モンゴルのアミール達は口実として牧地に来たと述べたが、実際は、彼らはフレグ軍の本隊の先鋒であった。進軍してきたフレグの本隊は大雨のために遅れ、間一髪、ルクヌッディーン・フルシャーは砦に上り、逃げおおせたのであった。『世界征服者の歴史』にも、アミールと軍隊が出現したことは記されているが、上述のエピソードは伝えられていない。

また、この直後、フレグの全軍が砦の四方を包囲したが、その長さは『モンゴルの諸情報』と『集史』のいずれにも、「6 フェルサング」(約36 km)と等しく記録されている¹³⁷⁾。そして、最終的には教主ルクヌッディーンは投降し、ニザール派によりフレグ軍に明け渡された城の数は、『世界征服者の歴史』が40城、『モンゴルの諸情報』は「100以上」、『集史』は「100に届く」数であったと伝えている¹³⁸⁾。その後、ルクヌッディーンはモンゴル本土のモンケ・カーンのもとに向かい、殺害された。彼の一族の結末は『世界征服者の歴史』には記載されていないが、『モンゴルの諸情報』と『集史』には、彼らが「カズウィーンとアブハルの間」¹³⁹⁾で殺害されたと記録されている。このように『世界征服者の歴史』には記載されていないが、『モ

ンゴルの諸情報』と『集史』に共通する情報が複数存在し、『モンゴルの諸情報』と『集史』の数や地名等の具体的な表現は酷似している。

ニザール派の居城陥落の後、フレグの軍隊はバグダードに進軍した。『集史』のバグダード征服の記録の典拠の一つは、前述したように『バグダード陥落の記録』である。しかし、同記録に記されていない記述も『集史』には存在する。

例えば、『集史』によると、フレグは、バグダードに進軍する前に、バグダード周辺の山地の征服に向かい、ダレタングを征服し、略奪したが、『モンゴルの諸情報』にもフレグがこの地域を攻略したことが記載されている¹⁴⁰⁾。

また、本隊より先にバグダードに到着したモンゴル軍はバグダードの城外で、カリフの軍隊と戦ったが、この時のカリフ軍の犠牲者は『集史』と『モンゴルの諸情報』によると、「12,000兵」であった¹⁴¹⁾。その後、モンゴル軍はバグダードを包囲して投石器を設置した。その際、『集史』によると、「バグダードの境域には石がなかったので、ジャルーラーとハムリーン山から運び、なつめ椰子の実をもいで、石の代わりに投げた (chūn dar ḥudūd-i Baghdād sang nabūd az Jalūlā wa jabal al-Ḥamrīn āwardand wa nakhlhā rā mī-burīdand wa ba-jā-yi sang mī-andāktand)」。一方、『モンゴルの諸情報』にも、「投石器の石がバグダードの境域になかったため、ジャルーラーとハムリーンの山から運んだ。なつめ椰子の実をのこぎりでもぎ、投石器で投げた (badān sabab ka sang-i manjanīq dar ḥudūd-i Baghdād nabūd az

136) *Jāmi'/Rawshan*: 988.

137) *Akhbār/Afshār*: 28; *Jāmi'/Rawshan*: 988.

138) *Jahāngushā*: v.3. 268; *Akhbār/Afshār*: 28; *Jāmi'/Rawshan*: 989.

139) *Akhbār/Afshār*: 29; *Jāmi'/Rawshan*: 989.

140) *Akhbār/Afshār*: 30; *Jāmi'/Rawshan*: 1005.

141) *Akhbār/Afshār*: 31; *Jāmi'/Rawshan*: 1011-1012.

Jalūlā wa jabal al-Ḥamrīn mī-āwardand wa nakhl rā ba-manshār mī-burīdand wa ba-manjanīq mī-andākhtand)」と書かれている¹⁴²⁾。

やがて、バグダードが陥落すると、バグダードの軍隊と共に、無数の人々が城から出ることを望み、城外に出て来た。『集史』によると、「彼らは、千人、百人、十人に分けられて、全員殺害された (ishān rā bar hazāra wa ṣada wa daha qīsmat karda tamāmat rā bi-kushtand)」。『モンゴルの諸情報』も、彼らは「万人、千人、百人、十人に分けられ、全員殺害された (qīsmat kardand ba-har tūmānī wa hazāra'ī wa ṣada'ī wa daha'ī wa jumla rā bi-kushtand)」と伝えている。一方、この時、町に残った者達は、『集史』によると、「穴 naqbhā や風呂釜 golkhanhā」に隠れた。『モンゴルの諸情報』でも、「穴 sūrākhā や風呂釜 golkhanhā や暗がり tārikhā に隠れて」助かったと記録されている¹⁴³⁾。

その後、バグダード征服が完了すると、モンゴル軍は「スィヤークーフとハマダーン」地方に移動した。フレグは、この頃、病気になるが、『集史』によると「すぐに」、『モンゴルの諸情報』によると「20日」で回復した¹⁴⁴⁾。

これらの記録は、『バグダード陥落の記録』には見当たらず、管見の限りでは同時期の諸史料のうち『集史』と『モンゴルの諸情報』に共通して記載されている。

また、フレグはバグダード陥落後、アッバース朝カリフの書記の子ジャラルルーディーンという人物を厚遇していた。1263年末に、彼はジュチ家ベルケとの対戦の援軍のために、バグダードでの軍隊召集と必要な物資を

調達する許可をフレグから受け、バグダードで兵を召集し、馬や武器、糧食等を入手した。しかし、彼は、その後フレグのもとには戻らず、そのまま軍隊を率いてエジプト方面へ逃亡した。

この出来事について、『モンゴルの諸情報』と『集史』の情報は大部分において一致している。それらの内容を次に列記する。ジャラルルーディーンのフレグ進言の内容、フレグの彼に対する命令の内容、ジャラルルーディーンを兵を募った際の勧誘の文句やバグダードから行軍する際の演説の内容、またバグダードの財庫から馬、武器、生活費、糧食を得たこと、行軍の際に太鼓を打ったこと、アラブ部族の駱駝や水牛を略奪したこと、そしてイマーム達の殉教地を巡礼するためという口実で兵士達の妻子も行軍に同行させたこと、その後、ユーフラテス河を渡り、そこで軍隊にシリア、エジプトに行くという真の目的を述べたこと、兵士達は恐れてバグダードに戻るとは言わず彼と共に逃げたこと、そしてこれを聞いたフレグが激怒したこと等、細かい経緯が『モンゴルの諸情報』と『集史』ではすべて一致している¹⁴⁵⁾。

この事件に関する記録は、他に、アラビア語のバグダード史 *al-Ḥawādīth al-jāmi'a*¹⁴⁶⁾ にも確認できるが、彼がフレグの命令により援軍の召集のために来ていたこと、集めた軍隊と共に逃げたこと、またこの出来事に対するフレグの反応等は記載されていない。ただ、彼は家畜を売り、借金して馬と旅の支度を整え、母を連れて狩と巡礼の名目で出発したが、シリアに逃亡したと伝えられている¹⁴⁷⁾。マムルーク朝の諸史料にも、この集団が亡命してきたことは記録されているが、ジャラー

142) *Akhbār/Afshār*: 32; *Jāmi'/Rawshan*: 1013.

143) *Akhbār/Afshār*: 33; *Jāmi'/Rawshan*: 1014.

144) *Akhbār/Afshār*: 34; *Jāmi'/Rawshan*: 1020.

145) *Akhbār/Afshār*: 39, 41-43; *Jāmi'/Rawshan*: 1049-50.

146) 本書はかつて Ibn al-Fuwaṭī の著作と考えられていた、現在は否定されている。1229-1300年の部分のみ現存する。

147) *Ḥawādīth*: 351-352.

ルッディーンが軍隊と共にやって来たことが簡潔に記されているのみで、彼の亡命の理由や背景は言及されていない¹⁴⁸⁾。つまりこの事件に関して『集史』と共通する同時期の詳細な記録は、管見の限りでは、『モンゴルの諸情報』のみである。

アバガ治世については、『モンゴルの諸情報』の情報量が少ないため比較が困難であるが、例えば同時期の史料の中で、『モンゴルの諸情報』と『集史』「アバガ紀」にのみ見られる記録として、フレグの西征の際にモンゴル本土に残っていたフレグの後クトイ・ハトンや王子達が、アバガ治世にモンゴル本土からイランに到着したという記述が挙げられる。その後、アバガはディヤール・バクル地方一帯にクトイ達の食邑を設定したが、両史料は、クトイ達がその地域から毎年「10万ディーナール」を得ていたと伝えている。

また、『世界征服者の歴史』の著者アターマリク・ジュワイニーと彼の弟で宰相であったシャムスッディーン・ジュワイニーの糾弾事件について、管見の限りでは、『集史』と『モンゴルの諸情報』にのみ記載されている情報として、例えば、密告者マジドゥル・ムルクが1280年春にアバガに謁見した場所が、アブハルとザンジャンの間位置するシャルウヤーズにあるリバート・ムサラム Ribāt-i Musallam の浴場 (ḥammām, garmāwa) の脱衣所 maslakh であったことが挙げられる¹⁴⁹⁾。

アフマド治世については、『集史』「テグデル・アフマド紀」と『モンゴルの諸情報』には、1284年1月末から7月にかけてのアフマドの軍隊とアルグンの軍隊の日々の行軍の

進捗や経路、対戦の状況、交渉の経過が記録されており、『ワッサーフ史』をはじめとする他の諸史料に比べ、その日程と経緯の記述は非常に細かい。『集史』では『モンゴルの諸情報』の情報に比べ、アルグン側の動向がより詳細に記されているが、その他は両書の記述の大筋は、日付も合わせてほぼ一致している。例えば、アフマドが派遣した先鋒隊が出兵して3日後に大雪が降り、前衛隊の行軍が遅れたことや、アフマドが率いた本隊が「8万戸」であったこと¹⁵⁰⁾をはじめとして、アフマドの軍隊の構成や行軍日時と地点等はほとんど一致している。

このように『集史』と『モンゴルの諸情報』に記録されているが、管見の限りでは同時期の他の史料には見られない情報や、『集史』と『モンゴルの諸情報』の表現が酷似している例が、『モンゴルの諸情報』の全体を通して確認される。無論、『集史』は『モンゴルの諸情報』に比べ非常に情報量が多く、他にも『世界征服者の歴史』や『バグダード陥落の記録』をはじめとして様々な典拠が存在したことは明白である。

はじめに触れたように、マルアシー図書館の写本集成は、ラシード区内の図書室に所蔵されていたが、所蔵された時期は明らかになっていない。クトゥブッディーンとラシードゥッディーンが互いに反目し合っていたという記録は様々な史料に確認され、これまで紹介されてきている¹⁵¹⁾。しかし、例えばラシードゥッディーンがクトゥブッディーンに送ったと記されている書簡¹⁵²⁾や、クトゥブッディーンが他の学者達と共にラシードゥッディーンの子孫の神学著作集 *Majmū'a* を推薦した

148) 中町 2000: 9.

149) *Akhhār/Afshār*: 50; *Jāmi'/Rawshan*: 1113.

150) *Akhhār/Afshār*: 56-57; *Jāmi'/Rawshan*: 1135.

151) *Ulamā'*: 221; *Minuwī*: 1969: 354; *Taqimīr* 1976: 46-50; 関 1983; *Waldbridge* 1992a: 22-23.

152) *Mukātabāt*: 159-168; *Sawānih*: 146-151. ただし、この書簡に表れるアルグンとハルジー朝スルターン、アラウッディーン (r. 1296-1316) の治世は重ならず、書かれた年代や宛先がクトゥブッディーンであったかという点については検討を要する。また、ラシードゥッディーンが息子に送った書簡にもクトゥブッディーンの名が現れる (*Mukātabāt*: 57; *Sawānih*: 68)。

ペルシア語とアラビア語の称賛の詞 *taqriẓ* が伝えられている¹⁵³⁾。この称賛の詞は、クトゥブッディーンにより1307年1月から2月の間に記されており、クトゥブッディーンの最晩年まで二人の間には私的な交流が維持されていた。またクトゥブッディーンは自著を宰相達や当時の著名人に献呈しており、クトゥブッディーン自らが生前に、何らかの事情で、ラシードゥッディーンやラシード区の図書館に自らの写本集成を譲渡したとしても不自然ではないし、写本集成が何らかの事情により間接的にラシードゥッディーンの手へ渡る可能性もあっただろう。

このクトゥブッディーンによる『モンゴルの諸情報』の写本がラシード区の図書館に所蔵された時期がラシードゥッディーンによる『集史』の編纂が終了する以前であったとすれば、『集史』の典拠とされた可能性もあるだろう。ただ、『モンゴルの諸情報』は、献呈や流布を前提として作成された段階の記録ではなく、他の文献との対照や厳密な校正を経っていない比較的個人的な記録である可能性が高いため、『モンゴルの諸情報』の写本、もしくはその原本が『集史』編纂時に直接使用されたと確定するのは早計である。しかし、『集史』と『モンゴルの諸情報』の写本の内容が共通の系統の情報源やテキストを介して相関性を有していることは確かである。

おわりに

本稿の考察を通して、『モンゴルの諸情報』の史的性質や『集史』をはじめとする他史料との関係が明確化された。

『モンゴルの諸情報』の著者は、フREGのイラン到着後、しばらくしてからモンゴルと接触し、イルハンの宮廷を訪れるようになったイラン地域出身の人物で、日常的にスーフイズムに親しみ、天文学の知識を有し、モ

ンゴルの歴史や王族、アミール達の系譜、モンゴル語、チュルク語起源の用語・慣習にある程度通じていた。断定することはできないが、『モンゴルの諸情報』の表現や情報の傾向を分析した結果、クトゥブッディーン自身が様々な情報源や、自らの経験と見聞に基づき、『モンゴルの諸情報』を執筆したという可能性もありうることを本稿では示した。現存する『モンゴルの諸情報』のテキストは恐らくは完成稿ではなく、著者が、後程、加筆を行うつもりであったのかもしれない。クトゥブッディーン自身が原本書写時に何らかの情報を書き加えた可能性もあるだろう。

また、『モンゴルの諸情報』のチンギス・ハンからフREGによるバグダード征服までの記述内容は、それ以前に執筆された『世界征服者の歴史』や『バグダード陥落の記録』『イルハン天文表』序文等の既知の史料を典拠として記録されたわけではないこと、そして『集史』『モンゴル史』の「フREG紀」から「アフマド紀」の記述内容と酷似する部分が散見され、『モンゴルの諸情報』と『集史』の情報は非常に共通点が多いことが明らかになった。

クトゥブッディーンによる『モンゴルの諸情報』の写本が『集史』編纂時に参照されたことと断定することは早計である。しかし、本稿における考察を通して、少なくとも両史料が共通の系統の情報源、またはテキストを介して相関性を有しているということは明白になった。

その一方で、『モンゴルの諸情報』には『集史』とは一致せず、むしろ矛盾する情報(表の▲)や『集史』や他の史料に見られない記述(表の★)も確認される。これまでも述べてきたように、『集史』は、フREGの孫であるイルハン国の7代ガザン・ハンの命令により編纂され、彼の弟である8代オルジェイトに献呈された公的な史書である。周知のように、『集史』の記述では、ガザンや彼の父祖、

153) Van Ess 1981: 22; Bashari 2003: 528-529.

特に曾祖父である初代フレグ、祖父である2代アバガ、父である4代アルグンが正当化される傾向があると言われている¹⁵⁴⁾。『集史』では、その他のハン達のうち、特にガザンと敵対した6代バイドゥにはハンの称号が使用されておらず、アルグンと対立した3代アフマドについてもほとんどハンという称号が付記されていない¹⁵⁵⁾。さらにバイドゥの治世のために独立した章はもうけられておらず、「ガザン紀」のガザン即位前の記録に組み込まれている。

また、『集史』では、ガザンのイスラーム改宗やガザンが「イスラームのスルターン」であることが強調されている。その一方で、ガザンの父アルグンと対立した3代アフマドがイスラームに改宗していたことやアフマドとイスラームとの関わりは、ほとんど言及されていない¹⁵⁶⁾。『集史』ではアフマドがイスラームに改宗した支配者の称号であるスルターンと呼ばれていたことが「テグデル（アフマド）紀」*Dāstān-i Tīkudar (Aḥmad)* の冒頭で言及されているが¹⁵⁷⁾、本文ではアフマドの名は称号を付されずに、アフマド、またはテグデルと表記されている。

一方、『集史』以前、または『集史』と同時期に執筆された史料では、アフマドに対して、ハン、またはスルターンの称号が使

用されている。例えば、ニザムッディーン・バイダーウィー著『諸史の秩序』*Nizām al-tawārikh*¹⁵⁸⁾のモンゴル史のアフマド治世に関する記述は、1295年ガザンの即位直後、つまり『集史』編纂以前に執筆されたと考えられるが、同書には「フレグ・ハンの子アフマド・ハンはアバガ・ハンの弟であった。多くの皇子達とアミール達が彼の帝王位に同意し、王座に座した。彼は善き帝王であり、非常にイスラームとイスラーム教徒達を好んだ」¹⁵⁹⁾とある。このように、アフマドに対して、ハンの称号が用いられ、彼がイスラームを尊重したことが明記されている。『集史』と同時期に執筆された『ワッサーフ史』でも、やはりアフマドにスルターンの称号が用いられている。他の史料と比較すると、『集史』におけるアフマドの位置付けは独特である。

一方、『モンゴルの諸情報』には、アフマドについて、「スルターン・アフマドと呼ばれていたテグデル」と記載されており¹⁶⁰⁾、本文の他の箇所でもスルターンの称号がアフマドの名に付記されている。また、先述のように、亡くなったアフマドと宰相シャムスッディーン・ジュワイニーに対して神の慈悲を願う祈願句も挿入されている。『モンゴルの諸情報』の著者は、アフマドとシャムスッディーンの処刑について他の故人と比べて特

154) 最近では、Jackson 1978: 188-189; Morgan 1997. 直接的な指摘として、トルイについては村岡 1996: 84-85; Amitai-Preiss 1995: 12. フレグとクビライの正当化については、杉山 1982: 311-312; ガザン系統に関しては Aubin 1995: 23; Pfeiffer 2006a: 370; *idem.* 2006b: 182.

155) 『集史』におけるハンの称号の使用については、宇野 2002: 55. アフマドは『五族譜』でもハンの称号を付されていない。ただ、これはアフマドが自らスルターンの称号を使用したためであり、『集史』のアフマドに対する否定的な偏向性の表れであるかどうかはさらに様々な文献、貨幣、文書等との比較を要するだろう。

156) 宇野 2002: 56; Pfeiffer 2006a: 370.

157) *Ĵāmi' / Rawshan*: 1131.

158) 簡潔なモンゴル史を含む「イラン・イスラーム世界普遍史」であり、フレグ・ハン治世までと1275年頃に記されたアバガ・ハン治世途中までの記述の2種の刊本が存在した。近年、本書の現存写本の系統を分析したメルヴィルが、バイダーウィー自身が数回にわたり書き加え、更に彼の死後も他者により加筆されていたことを明らかにし、7代ハン、オルジェイトまでの部分のモンゴル史の校訂テキストを論文中に掲載した (Melville 2007: 52-57)。バイダーウィーについては Kohlberg 1989 も参照。

159) *Nizām*: 53.

160) *Akhbār / Afshār*: 53.

別な感情を抱き、アフマドに対して、アフマドを処刑して新たに即位したアルグン・ハンに対してと同じように敬意をはらっていたと考えられる。

すなわち、『モンゴルの諸情報』は少なくとも『集史』に比べ、フレグ家王族やイルハン国宮廷の官僚に対して中立的な立場から記載されている。そして、『集史』は、『モンゴルの諸情報』か、その情報源を典拠の一つとして編纂されているにも関わらず、上述のような『モンゴルの諸情報』の視点や特徴を踏襲していないわけである。このアフマドに関する記述以外にも、『モンゴルの諸情報』には『集史』とは共通しない情報や矛盾する情報、そして『集史』には見られない記述が含まれている。筆者は、別稿において、それらの情報をその他の史料と対照して分析することを予定している。それらの分析により、『集史』やその影響を受けた諸史書の情報をそれぞれ相対化でき、イルハン国史の新たな一面を明らかにすることができるだろう。そして、それにより、『集史』の記述に基づいて出されてきたイルハン国に関する諸々の見解を再検討したり、新しい見解を提示することが可能になるであろう。

なお、本稿では、紙面の関係上、主にイルハン国期に執筆された一部の史料との比較に限定して分析を行ったが、他の諸文献との対照や検討の余地は残されている。これらの点についても、今後、考察してゆきたい。近年のイルハン国史研究の分野では新史料や様々な分野・形態の多言語史料の使用により史料が多様化し、研究の進展が顕著である。今後はそれに加え、『集史』をはじめとする古くから参照されてきた諸史料の性質をさらに注意深く分析して、その記述を再検討し、その他の多様な諸史料と対照しながら、従来の見解を再考すると共に、これまで明らかにされていない事実の探求が試みられることも望まれる。

文 献 目 録

●史料●

- Abū al-Fiḍā*: Abū al-Fiḍā (d. 732/1331). *al-Mukhtaṣar fī akhbār al-bashar*. 4 vols. Qairo, 1325 A.H./1907.
- Akhbār/Afshār*: Anonym. *Akhbār-i Mughūlān dar anbāna’-i Quṭb* (Īraj Afshār ed.), Qum, 2010.
- Akhbār/Mar’ashī*: MS Mar’ashī 12868/2 (ff. 22b-39b).
- Akhbār/Majlis*: MS Majlis 10117/2 (pp. 33-65).
- Bughuya*: Jalāl al-Dīn Suyūṭī (1445-1505). *Bughuya al-wu’ā fī ṭabaqāt al-lughawīyyin wa al-nuḥā* (Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm ed.), Cairo, 1384 A.H./1965.
- Durar*: Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī (d. 852/1449). *al-Durar al-kāmina fī a’yān al-mi’at al-thāmina*. 6 vols. (Muḥammad ‘Abd al-Mu’id et al. eds.), Hyderabad, repr. 1972.
- Fārs-nāma*: Ḥasan b. Ḥasan b. Fasā’ī (d. 1316/1898). *Fārs-nāma’-i Nāsirī*. 2 vols. (M. Rastgār Fasā’ī ed.), repr. Tehran, 1378kh.
- Faṣīḥī*: Aḥmad b. Muḥammad Khāfī (b.1375). *Mujmal-i Faṣīḥī*. 3 vols. (Maḥmūd Farrukh ed.), Mashhad, 1339-41kh./1960-62.
- Guzīda*: Ḥamd-Allāh Mustawfī (d. 1339-40). *Tārīkh-i guzīda* (‘A. Nawā’ī ed.), Tehran, repr. 1362 kh./1983.
- Ḥabīb*: Ghiyāth al-Dīn Khwāndamīr (d.1535-6). *Tārīkh-i ḥabīb al-siyar fī akhbār afrād al-bashar*. Tehran, repr. 1361kh/1982.
- Ḥawādīth*: [Pseudo]-Ibn al-Fuwaṭī. *al-Ḥawādīth al-jāmi’a wa al-tajārib al-nāfi’a*. (Muṣṭafā Jawwād et al. eds.), Baghdad, 1932.
- Ibn al-‘Amīd*: al-Makīn b. al-‘Amīd (d.672/1273). “La chronique des Ayyubidas d’al-Makin b. al-‘Amīd.” C. Cahen ed.), *Bulletin d’etudes orientales*, 15. 1955-1957: 108-84.
- Jahāngushā*: ‘Alā’ al-Dīn ‘Aṭā Malik Juwaynī (d. 1283). *Tārīkh-i jahāngushāy*. 3 vols. (M. Qazwīnī ed.), Leiden, 1912-1937, offset repr. Tehran, 1378kh./1999.
- Jāmi’/Alizada*: Rashīd al-Dīn Faḍl-Allāh Hamadānī (k.1318). *Jāmi-āt-tawārikh*. vol. 3 (Ā. Ā. Ālizadā ed.), Baku, 1957.
- Jāmi’/Blochet*: Rashīd al-Dīn. *Djami el-tévarikh. Histoire général du monde. Tarikh-i Moubarek-i Ghazani. Histoire des Mongols*. (E. Blochet ed.) Paris, 1911.
- Jāmi’/Jahn*: Rashīd al-Dīn. *Ta’rīḥ-i-mubārak-i Gāzānī des Rašīd al-Dīn Faḍl Allāh Abī-l-Ḥair: Geschichte der Ilḥāne Abāgā bis Gaiḥātū (1265-1295)*. (K. Jahn ed.), The Hague, 1957.
- Jāmi’/Rawshan*: Rashīd al-Dīn. *Jāmi’ al-tawārikh*.

- 4 vols. (M. Rawshan and M. Mūsawī, eds.), Tehran, 1373kh./1994.
- Ĵāmi' / Dānishpazhūh*: Rashīd al-Dīn. *Ĵāmi' al-tawārikh, qismat-i Ismā'iliyān wa Fātimiyān wa Nizāriyān wa Dā'iyyān wa Rafiqān*. (M. Dānishpazhūh and M. Mudarrisī, eds.), Tehran, 2536sh./1977.
- Kāmil*: Ibn al-Athīr (d.633/1233). *al-Kāmil fī al-Tā'rikh*. 12 vols. (C. J. Tornberg ed.), Beirut, 1979.
- Kayfiyat*: Naṣir al-Din Ṭūsī (d. 1274). *Kayfiyat-i wāqi'a-i Baghdād in Tārikh-i jahāngushā-yi Ḵwāymī*. vol. 3. (M. Qazwīnī. ed.) Leiden. 1937, offset repr. Tehran, 1999: 280–92.
- Mukātabāt*: Rashīd al-Dīn. *Mukātabāt-i Rashīdī*. (Muḥammad Shafī' ed.), Lahor, 1947.
- Majma'*: Ibn al-Fuwaṭī (d. 1323). *Majma' al-ādāb fī mu'jam al-alqāb*. 6 vols. Tehran, 1374kh./1995.
- Mukhtaṣar*: Ibn al-'Ibrī (d.1286). *Tā'rikh mukhtaṣar al-duwal* (A. Ṣāliḥānī ed.), Beirut, 1992.
- Nāsirī*: Minhāj al-Dīn 'Uthmān b. Sirāj Jūzjānī (b. 1193). *Ṭabaqāt-i Nāsirī*. vol. 2 ('A. Ḥabībī ed.), offset rep. Tehran, 1984.
- Nikpāy*: Nikpāy b. Mas'ūd. *Tārikh-i Nikpāy*. MS Paris, Ancien Fonds pers. 61.
- Nizām*: Nizām al-Dīn Bayḍāwī (13–14c.). *Nizām al-tawārikh*. ed. by C. Melville in "From Adam to Abaqa (Part 2)." *Studia Iranica*, 36. 2007: 52–57 (Appendix 3).
- Nujūm*: Ibn Taghribirdī, Abū al-Maḥāsīn Yūsuf (d. 1470). *al-Nujūm al-zāhira fī mulūk Miṣr wa al-Qāhira*. v.9 (Ibrāhīm 'Alī Ṭarkhān et al. eds.), Qairo, 1963.
- Qurashī*: Muḥyi al-Dīn b. Naṣr-Allāh Qurashī (d.1373). *al-Ḵawāhir al-muḍiyya fī ṭabaqāt al-Ḥanafīya*. vol.3. (Muḥammad Ḥilw 'Abd al-Fatāḥ ed.), Riyadh, 1993.
- Rawḍāt*: Ḥāfiẓ Ḥusayn Karbalā Tabrizī (d.997/1589). *Rawḍāt al-jinān wa jannāt al-jinān*. 2vols. (Ja'far Sulṭān al-Qurrā'i ed.), Tabriz, 1382kh./2001.
- Sawāniḥ*: Rashīd al-Dīn. *Sawāniḥ al-afkār-i Rashīdī* (Muḥammad-Taḳī Dānishpazhūh ed.), Tehran, 1357 A.H./1947.
- Simṭ*: Nāṣir al-Dīn Munshī Kirmānī (13–14c.). *Simṭ al-'ulā lil-ḥaḍrat al-'uliyā* ('A. Iqbāl ed.), Tehran, 1328kh./1949.
- Sira*: al-Nasawī, Shihāb al-Dīn Muḥammad (d. 1249–50). *Sira as-Sulṭān Dzhalāl ad-Dīn Mankburny*. (З. М. Буниятова ed.), Москва, 1996.
- Sistān*: anonym. *Tārikh-i Sistān*. (Muḥammad Taḳī Bahār ed.), Tehran, rep. 1366kh./1987.
- Shāfi'iya*: Subkī, Taj al-Dīn 'Abd al-Wahhāb Ibn 'Ali (d. 771/1370). *Ṭabaqāt al-Shāfi'iya al-Kubrā*. v.10 (M. Ṭanāḥī and 'A. Ḥilw, eds.), Qairo, 1964.
- Shāhi*: anonym. *Tārikh-i shāhi* (M. Bāstānī Pārizī ed.), Tehrān, 2535sh./1976.
- Shirāz-nāma*: Mu'in al-Dīn Aḥmad Shirāzī (d. 1387). *Shirāz-nāma* (I. W. Jawwādī ed.), Tehran, 1350kh/1971.
- Tashrif*: Ibn 'Abd al-Zāhir (d. 1292). *Tashrif al-ayyām wa al-'uṣūr fī sirāt al-Malik al-Manṣūr al-Zāhir*. (Murād Kāmil and Muḥammad 'Alī Najjār, ed.), Cairo, 1961.
- '*Ulamā'*: Ibn Rafī' al-Sallāmī (d. 774/1372) *Tā'rikh 'ulamā' Baghdād*. (al-Taḳī al-Fāsi ed.), Baghdad, 1938.
- Ūljāytū*: Abū al-Qāsim 'Abd-Allāh b. Muḥammad Qāshānī (d. 738/1377). *Tārikh-i Ūljāytū*. (Mihīn Hamblī ed.), 1969. Tehran, repr. 1384kh./2005.
- Ẓij/Qazwīnī*: Naṣir al-Dīn Ṭūsī. *Muqaddima-i zīj-i Ilkhānī in Sabkshināsī*. vol. 3 (M. Bahār ed.) Tehran, repr. 2005: 158–159.
- Ẓij/Boyle*: Naṣir al-Dīn Ṭūsī. *Muqaddima-i zīj-i Ilkhānī* in "The Longer Introduction to the Zīj-i-Ilkhani of Nasir al-Din Tusi." (tr. and ed. by J. A. Boyle). *Journal of Semitic Studies*, 8. 1963: 244–254.
- Ẓubdat*: Abū al-Qāsim Kāshānī. *Ẓubdat al-tawārikh: bakhsh-i Fātimiyān wa Nizāriyān* (M. Dānishpazhūh ed.), Tehrān, 1366kh./1987.
- Waṣṣāf*: Shihāb al-Dīn 'Abd-Allāh Shirāzī (d. 1334). *Tājziyat al-amṣār wa tajziyat al-'aṣār (Tārikh-i Waṣṣāf)* (M. M. Iṣfahānī ed.), Bombay, 1259A.H. (offset repr. Tehran.).
- Chronography*: Bar Hebraeus (d. 1286). *The Chronography of Gregory Abū'l-Faraj 1225–1286*. (E. A. Wallis Budge tr.), London, 1932, repr. Amsterdam, 1976.
- 『元朝秘史』：村上正二『モンゴル秘史』2卷，東洋文庫，1972。

●参考文献●

- Aigle, Denis. 2005. "Bar Hebraeus et son public, à travers ses chroniques en arabe et en syriaque." *Le Muséon*, 118(1/2): 83–106.
- Allsen, Thomas. 1987. "The Prince of the Left Hand: An Introduction to the History of the Ulus of Orda in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries." *Archivum Eurasiae Medii Aevi*, 5: 5–40.
- . 2001. *Culture and Conquest in Mongol Eurasia*. Cambridge.
- Amitai-Preiss, Reuven. 1995. *Mongols and Mamluks*. Cambridge.
- Anwarī, Sayyed 'Abd-Allāh Anwār. 2005. "QOTB-

- AL-DIN ŠIRĀZĪ." *EIr*. Online edition, <http://iranica.com/articles/qotb-al-din-sirazi>
- Aubin, Jean. 1995. *Émirs mongols et vizirs persans dans les remous de l'acculturation. Studia iranica*, cahier 15. Paris.
- Ayalon, David. 1971. "The Great Yasa of Chingiz Khan: A Re-examination." *Studia Islamica*, 33: 97-140.
- Bakar, Osman. 1992. *Classification of Knowledge in Islam. A Study in Islamic Philosophies of Science*. Cambridge.
- Barthold, W. 1968. *Turkestan down to the Mongol Invasion*. London.
- Barthold, W.-[J. A. Boyle] 1965 "DJWAYNĪ, 'ALĀ al-DĪN." *EI2*. vol.2: 606-607.
- Bashari, Jawād. 2005. "Ash'ar-i Fārsi dar jung-i khaṭṭ-i Quṭb-e Shirāzi." *Nushkha-pazhūhī* (Abū al-Faḍl Ḥāfiẓiyyān Bābuli ed.), 2: 525-534.
- 2011. "Kitāb wa kitāb-pazhūhish; Pābarg 7." *Ā'īnā-pazhūhish*, 125: 63-71.
- Bazmee Ansari, A.S. 1965. "Al-DJŪZDJANĪ." *EI2*. vol.2: 609.
- Biran, Michal 2009. "JOVAYNĪ, ŠAḤEB DIVĀN." *EIr*. vol.15: 71-74.
- Boyle, J.A. 1961. "The Death of the Last 'Abbasid Caliph: a Contemporary Muslim Account." *Journal of Semitic Studies*, 6: 145-161.
- 1962. "Juvaini and Rashīd al-Dīn as Sources on the History of the Mongols." *Historians of the Middle East* (B. Lewis and P. M. Holt, ed.), 133-137, London.
- 1997. *Genghis Khan: The History of the World-Conqueror by Ata-Malik Juvaini* (J. A. Boyle tr. and D. O. Morgan ed.), Manchester: Manchester Univ. Press and UNESCO.
- Clauson, Sir Gerald. 1972. *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford.
- Cleaves, F. W. 1956. "Historicity of Baljuna Covenant." *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 18 (3/4): 357-421.
- Daftary, Farhad 1992. "Persian Historiography of the Early Nizari Isma'ilis." *Iran*, 30: 91-97.
- Daiber, H and Ragep, F. J. 2000. "AL-ṬŪSĪ." *EI2*. vol.10: 746-752.
- Doerfer, Gerhard. 1963. *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen. Band 1. Mongolische Elemente im Neupersischen*. Wiesbaden.
- Doerfer, Gerhard. 1975. *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen. Band 4. Türkische Elemente im Neupersischen*. Wiesbaden.
- Golden, Peter B. 2002. "TUŠĪ: The Turkic Name of Joči." *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 55(1-3): 143-151.
- Humā'i, Māhdukht Bānū. 1990. "Muqaddima'i muṣaḥḥih." *Durrat al-tāj: bakhsh-i hikmat-i 'amali wa sayr wa sulūk*, Tehran, 1991: 1-56.
- Iqbāl, 'Abbās. 1932. "'Allāma'-i Quṭb al-Dīn Shirāzi (634 tā 710)." *Armaghān*, 13 (10), 1932: 659-68; reprinted in *Majmū'a-i Maqālāt-i 'Abbās Iqbāl Āshṭiyānī* (M. Dabīrsiyāqī ed.), Tehran, 1971: 441-449.
- Jackson, Peter. 1978. "The Dissolution of the Mongol Empire." *Central Asiatic Journal*, 22: 186-244.
- 2002. "WASSĀF." *EI2*. vol. 11: 174.
- Kohlberg, E. 1990. "BAYZĀWĪ, NĀŠER-AL-DĪN." *EIr*. vol.4: 15-17.
- Lane, George. 1999. "An Account of Gregory Bar Hebraeus Abu al-Faraj and His Relation with the Mongols of Persia." *Hugoye, Journal of Syriac Studies*, 2 (2): 1-44.
- 2003. *Early Mongol Rule in the Thirteenth-Century Iran*. Cambridge.
- 2009. "JOVAYNĪ, ALĀ'-AL-DIN." *EIr*. vol. 15: 63-68.
- Mar'ashī Najafī, Sayyid Maḥmūd (*et al.*) 2005: *Fihrist-i nuskha-hā-yi khaṭṭī-yi Kitābhāna'-i Buzurg-i Ḥadrat-i Āyat Allāh al-'Uẓmā Mar'ashī Najafī*. vol. 32. Qum.
- Melville, Charles. 1998. "EBN AL-FOWATI." *EIr*. vol. 8: 25-26.
- 2007. "From Adam to Abaqa (Part2)." *Studia Iranica*, 36: 7-64.
- 2003. "HAMD-ALLĀH MOSTAWFI." *EIr*. vol. 11: 631-634.
- 2008. "JAHĀNGOŠĀ-YE JOVAYNĪ." *EIr*. vol. 14: 378-382.
- 2009. "Anatolia under the Mongols." *Cambridge History of Turkey. vol. I. Byzantium to Turkey 1071-1453*. (K. Fleet ed.), 51-101: Cambridge.
- Minuwī, Mujtabā. 1969. "Mullā Quṭb Shirāzi." *Yād-nāma'-i Īrāni-yi Minūrski* (Mujtabā Minuwī and Īraj Afshār eds.), 165-205: Tehran.
- Mīr, Muḥammad Taqī. 1970. "'Allāma-yi Quṭb al-Dīn Shirāzi." *Khīrad wa Kūshish*. 2/5: 451-465.
- 1976. *Sharḥ-i ḥāl wa āthār-i 'Allāma Quṭb al-Dīn Shirāzi*. Shirāz.
- Mishkāt, Sayyid Muḥammad. 2006. "Muqaddima'i muṣaḥḥih-i Durrat al-tāj." Quṭb al-Dīn Shirāzi. *Durrat al-tāj* (M. Mishkāt ed.), 32-78: Tehran.
- Morgan, David. 1995 "RASHĪD al-DĪN ṬABĪB." *EI2*. vol. 8: 443-444.
- 1997. "Rašīd al-Dīn and Ghazan Khan." *L'Iran face à la domination mongole* (D. Aigle

- ed.) 179-188, Tehran: IFRI.
- 2007. *The Mongols*, 2nd edition, Oxford: Blackwell Pub.
- Mudarris Raḍawī, Muḥammad Taqī. 1991. *Aḥwāl wa āthār-i Khwāja Naṣir al-Dīn Ṭūsī*. Tehran.
- Naṣr, Seyyed Hossein. 1996. *The Islamic Intellectual Tradition in Persia* (Mehdi Amin Razavi ed.). Richmond.
- Naṣr, Seyyed Hossein and Oliver Leaman 1996. *History of Islamic Philosophy (Routledge History of World Philosophies. vol. 1)*. London.
- Naẓarī, Maḥmūd. 2009. *Fihrist-i Nuskhā-hā-yi khaṭṭī-yi Kitābhāna'-i Majlis Shawrā-yi Islāmī*. vol. 32. Tehran.
- Özgüdenli, Osman G. 2003. “Bir İlhânlı Şehir Modeli: Rab’-i Reşîdî’de Meslekler, Görevler ve Ükretler.” *Osmanlı Öncesi ile Osmanlı ve Cumhuriyet Dönemlerinde Esnaf ve Ekonomi Semineri, 9-10 Mayıs 2002*, I, 105-126: İstanbul: İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Tarih Araştırma Merkezi, (repr. Özgüdenli 2006: 207-233).
- 2005. “İlhânlı Tarihine Ait Yeni Bir Kaynak: Târîh-i Vassâf’ın Müellif Nüshası.” *Belleten Dergisi*, 257, (repr. Özgüdenli 2006: 307-338).
- 2006. *Ortaçağ Türk-İran Tarihi Araştırmaları*. İstanbul.
- Pfeiffer, J. 2006a. “Reflection on a ‘Double Rapprochement’: Conversion to Islam among the Mongol Elite during the Early Ilkhanate.” *Beyond the Legacy of Genghis Khan* (Linda Komaroff ed.), 369-389, Leiden: Brill.
- 2006b. “Aḥmad Tegüder’s Second Letter to Qalā’ün (682/1283).” *History and Historiography of Post-Mongol Central Asia and the Middle East, Studies in Honor of John E. Woods* (J. Pfeiffer and S. A. Quinn, eds.), 167-202, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Pourjavady, Naṣr-Allāh and Zh. Vesel ed. 2000. *Naṣir al-Dīn Ṭūsī: Philosophe et savant du XIII^e siècle*. Tehran.
- Pourjavady, Reza and Sabine Schmidtke. 2004. “Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī’s (d. 710/1311) Durrat al-Tāj and Its Sources (Studies on Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī, I).” *Journal Asiatique*, 292/1•2: 311-330.
- 2007. “The Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī (d. 710/1311) Codex (MS Mar’ashī 12868) (Studies on Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī, II).” *Studia Iranica*, 36/1: 279-301.
- 2009. “Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī (d. 710/1311) as a Teacher: An Analysis of His Ijāzāt (Studies on Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī, III).” *Journal Asiatique*, 297/1: 15-55.
- Qurbānī, Abū al-Qāsim. 1968. “Quṭb al-Dīn Shīrāzī.” *Rāhnāmā-yi kitāb*, 74: 429-435.
- Rachewiltz, Igor De. 1983. “Qan, Qa’an and the Seal of Güyüg.” *Documenta Barbarorum* (Sagaster, K., and Weiers, M. eds.), 273-281: Wiesbaden.
- Redhouse, Sir James W. 1890. *A Turkish and English Lexicon*. repr. 1996.
- Rosenthal, F. 1968. “IBN AL-FUWAṬĪ.” *EI2*. vol. 3: 769-770.
- Şafā, Dhbayh-Allāh Şafā. 1987. *Tarikh-i adabiyāt dar Īrān wa dar qalam-raw-yi zabān-i Pārsī*. vol. 3. (2). Tehran.
- Segal, J. B. 1968. “IBN AL-‘IBRĪ.” *EI2*. vol. 3: 804-805.
- Spuler, Barthold. 1968. “ḤAMD ALLĀH.” *EI2*. vol. 3: 122.
- 1965. “DĪJUWAYNĪ, SHAMS AL-DĪN.” *EI2*. vol. 2: 607.
- Stang, Håkon. 1985. “The Baljuna Revisited.” *Journal of Turkish Studies*, 9: 229-235.
- Tafaḍḍuli, Maryam. “Nuskhā-hā-yi aṣl az şada’i chahārum tā hashtum-i hijrī.” *Nuskhāpazhūhī*, vol. 1, (Abū al-Faḍl Ḥāfiẓiyyān Bābuli ed.), 311-344: Qum.
- Teule, Herman G. B. 1997. “EBN AL-‘EBRĪ.” *EI2*. vol. 8: 13-15.
- Van Ess, Josef. 1981. *Der Wesir und Seine Gelehrten*. Wiesbaden.
- Walbridge, John. 1992a. *The Science of Mystic Lights. Quṭb al-Dīn Shīrāzī and the Illuminationist Tradition in Islamic Philosophy*. Cambridge.
- 1992b. “The Political Thought of Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī.” *The Political Aspects of Islamic Philosophy* (C. E. Butterworth ed.), 345-378: Harvard Univ. Press.
- 1999. “A Sufi Scientist of the Thirteenth Century: The Mystical Ideas and Practices of Quṭb al-Dīn Shīrāzī.” *The Heritage of Sufism*. vol. 2 (L. Lewisohn ed.), Oxford: 323-340.
- Wickens, G. W. 1962. “Nasir ad-din Tusi on the Fall of Baghdad: a Further Study.” *Journal of the Semitic Studies*, 7: 23-35.
- Wiedemann, E. 1986. “KUTB AL-DĪN SHĪRĀZĪ.” *EI2*. vol. 5: 547-548.
- Yūsifi-yi Rād, Murtaḍā. 2007. *Andisha’-i siyāsī-yi Quṭb al-Dīn Shīrāzī*. Qum.
- EI2 (Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition). 12 vols. Leyden. 1979-2002.
- EI2 (Encyclopaedia Iranica)*. 7 vols. New York. 1985-2008.
- 赤坂恒明 2000 「十四世紀中葉～16世紀初めにおけるウズベク＝イスラーム化後のジュチ・ウ

- ルスの総称—『史学雑誌』142: 38-57.
 ——— 2005『ジュチ裔諸政権史の研究』東京；風間書房。
 諫早庸一 2008「ベルシア語文化圏における十二支の年始変容について——ティムール朝十二支考」『史林』91(3): 42-73.
 井谷綱三 1980「モンゴル侵入後のルーム」『東洋史研究』39-2: 110-139.
 岩武昭男 1994「ラシードウッディーンの著作全集に関する近年の研究動向」『西南アジア研究』40: 55-72.
 ——— 1995「ラシード区ワクフ文書補遺写本作成指示書」関西学院大学東洋史学研究室編『アジアの文化と社会 関西学院大学東洋史学専修開設三十周年記念論集』京都；法律文化社: 277-309.
 ——— 1997「ラシード著作全集の編纂——『ワッサーフ史』著者自筆写本の記述より」『東洋学報』78(4): 1-32.
 宇野伸浩 2002「『集史』の構成における「オグズ・カン説話」の意味」『東洋史研究』61-1: 110-137.
 ——— 2006「ラシードウッディーン『集史』第1巻「モンゴル史」の諸写本に見られる脱落」『人間環境学研究』5(1): 95-113.
 ——— 2008「フレグ家の通婚関係にみられる交換婚」『北東アジア研究』別冊第1号: 27-45.
 北川誠一 1977「13-15世紀のアルメニア語史料」『史朋』6: 1-23.
 ——— 1979「モンゴル帝国とグルジア王国」『史朋』10: 1-21.
 ——— 1986「ヤズド・カークーイェ家とモンゴル人」『文経論叢』21(3) (人文科学篇6): 115-142.
 ——— 1988「大ロル・アタベグ朝とモンゴル帝国」『文経論叢』23(3) (人文科学篇8): 77-92.
 ——— 1997「モンゴル帝国のグルジア征服」『オリエンツ』40(2): 69-84.
 黒柳恒男 1966「ナスィール・ウッ・ディーン・トゥースィーの生涯と業績」『オリエンツ』9(2・3): 163-186.
 斉藤純男 2003『中期モンゴル語の文字と音声』松香堂。
 杉山正明 1982「クビライ政権と東方三王家——鄂州の役前後再論——」『東方学報』54: 257-315。(杉山2004に再録されたが、若干の記述変更が存在するため、本稿では雑誌論文の頁数を表記した)
 ——— 2004『モンゴル帝国と大元ウルス』京都：京都大学学術出版会。
 関 喜房 1983「クトゥブッディーン・シーラーズィーの生涯と業績」『イスラム世界』21: 22-38.
 高木小苗 2009「フレグ遠征時のイランにおけるモンゴル王族の権限と私財」『史滴』31: 133-156.
 中町信孝 2000「イル・ハン国からマムルーク朝に流入した亡命軍事集団」『史学雑誌』109(4): 491-532.
 本田実信 1991『モンゴル時代史研究』東京大学出版会。
 ——— 1967「阿母河等処行尚書省」本田1991: 101-126。(初出「阿母河等処行尚書省考」『北方文化研究』2)。
 ——— 1972「フラグの暗殺教団討滅」本田1991: 165-181。(初出「異端派イスラの暗殺者教団について」『伝統と現代』14)。
 村岡 倫 1996「トルイ=ウルスとモンゴリアの遊牧諸集団」『龍谷史壇』105: 64: 63-88。
 ——— 1999「オルダ・ウルスと大元ウルス——「カイドウの乱」・「シリギの乱」をめぐる——」『東洋史苑』52・53: 1-38。
 吉田順一 1968「元朝秘史の歴史性」『史観』78: 40-56。

原稿受理日—2011年4月4日

[追記] なお、ホセインアリー・キャリーミーヤーン・ミーリーは『モンゴルの諸情報』の冒頭部分の「モンゴルの王朝の始まり *ibtidāʿ-i dawlat-i Mughūl* とチンギス・ハンの勃興」とナスィールウッディーン・トゥースィー作と伝えられるホラズムシャー朝の簡潔な記録の冒頭の題辞「ホラズムシャー朝の始まりの記述 *zhikr-i ibtidāʿ-i dawlat-i Khwārazmshāhiyān*」の相似と両記録の内容が王朝初期史に留まらないという共通性を指摘している (H. Karīmīyān Mirī. 2010. “Muʿarrifi-yi kitāb.” *Guzārish-i mirāth*, 38: 57-58)。同ホラズムシャー朝の記録は、1321-23年に作成された写本集成 *Safinaʿ-ī Tabriz* 所収 (Abū al-Majd Muḥammad b. Masʿūd Tabrizī. *Safinaʿ-ī Tabriz*. Tehran, 2003: 439)。またクトゥブッディーン・シーラーズィーとラシードウッディーンの関係については、他に『シャイフ・ウワイス史』の699/1299-1300年頃の文脈に、医師ラシードウッディーンにクトゥブッディーンが常に同伴し、指導していたという記述がある (Abū Bakr Quṭbī Ahārī. *Tawārikh-i Shaykh Uways*. (Ī. Afshār ed.), Tabriz, 2011: 204)。

表 1：『モンゴルの諸情報』の構成と他の諸史料との情報の対応

(同記録にのみ見られる情報を含む★、『集史』と共通◎、▲：『集史』と異なる情報、事実と異なる情報×)

表 1-1：チンギス・ハン治世～フレグ西征

『モンゴルの諸情報』			他史料
頁	年月	内容	
19		チンギスの系譜	
	1202.12-1203.9	チンギス勃興の年（東西の暦で表記） ★バルジュナの水無河で雀の肉を兵士達と分け合う →彼らはチンギスの追従者となる	一部の暦の年表記が異なる（ <i>Zj.</i> 248）
20		×チンギスの4子、チャガタイ・ハン、オゴデイ・ハン、トルイ・ハン、トウシー・ハン ×チャガタイはチンギスの死後、間もなく死去 オゴデイは後継者に任命される	
		×チンギスによるジュチ任命地の範囲 →ジュチの一族が同地を支配する ×ジュチ家歴代宗主の説明	
		オゴデイ・カーン死後、グユク・ハン即位	
		グユク死後、話し合いとジュチ家バトの意志で、モンケ・カーン即位 チャガタイとオゴデイの子孫による謀反。彼らへの処罰	
21	650年代	モンケがフレグをアラブと非アラブ諸地方平定のため派遣	
22		フレグの征服地域／★フレグの宮廷での指令の的確さ	
		フレグがアム河を渡りホラーサーンに入る	
23		★東方から同行したフレグの大軍、弩や投石機の説明	
24		▲◎フレグによるアム河以西地域の支配者達への援助要請の発令、使節派遣 →彼ら自らか兄弟・親族が軍隊、装備、贈物等と共に集結	アム河渡河以前、キシユでモンケのヤルリグ発令（ <i>Jāmi'</i> 979）
		★各地から家畜により運ばれた糧食、東方の蕎麦や雑穀 半ファルサング毎に穀物や物資の備蓄の小山	各宿場に糧食の山（ <i>Jahāngushā</i> 941）
25	1253.5	×フレグによるニザール派のギルドクーフ城包囲	キトプカ軍による包囲
26		◎塹壕の構造、ギルドクーフ城内の疫病と援軍到着	（ <i>Jāmi'</i> 981-2）
27	1255.12	ニザール派教主アラーウディーン殺害	
		フレグとニザール派教主フルシャーの交渉	<i>Jāmi'</i> 988
28		◎突然のモンゴル軍の到来、フレグ本隊の接近と包囲	
		フルシャー投降（13日後）／◎明け渡された他の城砦の数	<i>Jāmi'</i> 989
29		フルシャーの殺害／◎フルシャーの一族の殺害場所	<i>Jāmi'</i> 991
30	1257初	◎フレグによるジバルのマリク達の攻略	<i>Jāmi'</i> 1004-05
31	1257.10-11	バグダード進軍／◎バグダード城外対戦死者 1200人	<i>Jāmi'</i> 1011-12
32		★バグダードの死体処理方法 フレグによるバグダード包囲	
		◎投石機用の石の運搬、石の代わりに椰子の実を投げる	<i>Jāmi'</i> 1013
33	1258	カリフの講和要請 ◎フレグ、カリフの家臣にヤルリグとパイザを与える ◎カリフの軍隊、バグダードの民は投降、殺害 残った者達は城内に隠れていた／カリフの投降 フレグ、バグダード城内で宴会	<i>Jāmi'</i> 1014 <i>Jāmi'</i> 1020
34	日付空白	ワクフ村への移動 カリフと息子達の殺害 フレグの帰還／◎フレグ 20日間病	
	1258-9（冬）	★フレグはアッラーンとムーガーンに出発	
	1259冬末から初夏	フレグの子ユシムト軍によるディヤール・バクル遠征、帰還	
	1259秋	フレグのシリア進軍	

表 1-1 続き：フレグ遠征～フレグ治世

『モンゴルの諸情報』			他史料
頁	年月	内容	
36	1260 夏	キトブカの勇猛さについて ◎マムルーク朝軍がバイダル率いるモンゴル先鋒隊駆逐 ★キトブカが先鋒バイダルを叱責	<i>Jāmi'</i> 1031
37		キトブカ軍の敗退 キトブカの殺害／キトブカの家族等が捕えられる	
38		マムルーク朝スルタン、クドゥズの殺害／バイバルス即位	
		バイバルス、地中海沿岸の町の征服 ★フランク軍との出来事	
39		フレグ、何度もシリアに軍隊派遣→成果を得ず ★親族の敵対のためシリアとミスルへ進軍せず	
	記載無し	フレグとジュチ家宗主ベルケの対戦 ◎フレグ軍がキプチャク地方のベルケ軍の家々に下馬 ◎ベルケ軍がフレグ軍駆逐、フレグ軍敗走、多数の死者	1261 年 (Amitai 1999) <i>Jāmi'</i> 1046
		◎カリフのダワートダールの子ジャラルルーディーンがカリフ旧領での対ベルケ戦のためのキプチャク兵召集を提言	<i>Jāmi'</i> 1049
40	対戦以前	フレグはベルケ軍やベルケ側に属した人々を殺害 一部捕虜、一部逃亡	
		←★(ジュチ家王族)バラガイ、トタル、クリの占有的支配 フレグに不満を持つ →★ベルケと彼の一族の軍政官と長官は、ホラーサーン、イラク、アゼルバイジャン、アッラーン、グルジスターンの諸地方のより良い場所を所有。私有地と公言	
41	1258	→◎バラガイが酒宴中に死去 ◎トタルも魔術を行ったと密告され、ベルケのもとに送られ、送り返された後、フレグが彼を処刑	彼らの死に関する史料は複数あるが、記述が『集史』に近い(<i>Jāmi'</i> 1034)
42	1263.11-1264.10	フレグはジャラルルーディーを兵召集のためバグダードに派遣	<i>Jāmi'</i> 1049-50 <i>Jāmi'</i> 1051
		◎彼がバグダードで、馬、武器、生活費等の提供の命令を出す ◎兵を召集 ◎家畜、馬、武器、糧食等を獲得	
43		軍の移動の太鼓／兵をその妻子と共に率いる →バグダードから行軍、シリアに逃亡／◎フレグ激怒	
44	1265.1-2	◎フレグの病 ジャガトウで死去 ×フレグには 13 人の息子がいた	<i>Jāmi'</i> 1051 14 人 (<i>Jāmi'</i> 965)
	死去 3 日後 数日後	フレグの死後、長子アバガと▲3子ユシムトの召還 ユシムトの到着→2日滞りして自らの滞在地に帰還 アバガの到着→▲早々に帰還	
	▲同週	フレグの(正室)トクズ・ハトン死去	フレグの死の4ヶ月 11日後、アバガの即位3日前に死去 (<i>Jāmi'</i> 1052)

表 1-2：アバガ治世

『モンゴルの諸情報』			他史料
頁	年月	内容	
45	死の 5, 6 ヶ月後	クリルタイ→アバガ即位／トクズとフレグの権威と功績	1265.6.18 (<i>Jāmi'</i> 1059)
46	1268.9-1269.8	◎フレグ妃クトイ・ハトンがモンゴルから同地の混乱のために、イラン地域に到着 ◎2人の息子テクシとアフマドが彼女に同行 ◎アバガは財貨と私領を与える	<i>Jāmi'</i> 1063-4
	フレグ死去の際	★フレグの遠征に同行し、クトイの分け前を所有していた側室アリの自刃→クトイはアリの家に居住	
47		★クトイ達一行はアバガの帝王位を妬んでいた ◎ユシムト死去, ★その後、テクシ死去, ◎ユシムトの弟(トブシン)死去	1271年 (<i>Jāmi'</i> 1098)
47		★アバガは弟達に与えていた私領を彼らの子供に授与	
48	1276.6-1277.6	マムルーク朝バイバルスのルーム侵攻, モンゴル軍対戦 →モンゴル軍敗北／アバガのルーム進軍	1277.4: 対戦 1277.7: アバガ進軍 (<i>Jāmi'</i> 1102)
49	×ルーム進軍の翌年 (1278 → 1281)	アバガによるシリア進攻 フレグの弟, モンケ・テムルの進軍 モンケ・テムル敗走, アバガは翌年自らの出兵を決定	1280 進軍 (<i>Ḥawādith</i> 412) → 128 敗走 (<i>Ḥawādith</i> 417; <i>Jāmi'</i> 1116-17; <i>Waṣṣāf</i> 89)
	同年冬 (1282 冬)	アバガはバグダードに滞在 ※ 1278-79: ホラーサーン滞在, 1279-1280: アッラーン冬営, 1281 末: バグダード滞在 (<i>Jāmi'</i> , 1109, 1113, 1117) アターマリク・ジュワイニーは捕えられ, 家屋押収, 尋問 ←マジュドウルムルクは, 一年前からジュワイニー兄弟失墜を陰謀	(<i>Jāmi'</i> 1115, 1117)
50	1281 春	→◎マジュドウルムルクはアバガにシャルウヤーズの隊商宿の浴場脱衣所でジュワイニー兄弟を告発 アターマリクがバグダードから召喚される	(<i>Jāmi'</i> 1114) (<i>Jāmi'</i> 1117)
51		◎アバガはマラニガの仏寺で、マジュドウルムルクに対する命令を読み上げさせる →バグダードでアターマリク財産徴発	※マジュドウルムルクの件について (<i>Ḥawādith</i> 412-413)
52	1282 冬末 1282.4.1	アバガはハマダーンに行く アバガ深酒, 死去→現シャーヒー島に埋葬	1282.2 (<i>Jāmi'</i> 1117)

表 1-3: アフマド治世 1

『モンゴルの諸情報』			他史料
頁	年月	内容	
53	1282.5.6	全王族の相談によりスルタン・アフマドと呼ばれたテグデル即位	
54	1282.4-83.4	アフマドは弟コンコルタイを対シリア軍防衛のためルーム派遣 ★コンコルタイは規則を増やし、ルームの住人の従属民や隷属者を略奪 →★アフマドに伝わり、コンコルタイを召還し、問責	<i>Waṣṣāf</i> 125; <i>Jāmi'</i> 1129 =カラーウーン返書に類似内容あり
55	1284.1.18	コンコルタイはアバガの長子アルグンと共にアフマド打倒を共謀 アフマドはコンコルタイを捕える ←★コンコルタイはアフマドとクトイ・ハトンの前でアフマドとアルグンの対立の際、隅に行き戦の只中に留まらないと発言 ★コンコルタイは冬营地帰還／彼に関する密告	
56	同日夜	★コンコルタイのアミール、クチュクが 10 日間、アフマドの宿営滞在→人々はアフマドに彼は間諜だと言う アフマドはコンコルタイの背骨を折る（処刑） →★チンギスが「誰でも王の陰で嘲る者は彼の背骨を折らねばならない」と言っていたため	
		★クチュク裁判、処刑の経緯 100 回の杖刑に処されるが、コンコルタイとアルグンの相談について黙秘 アフマドは息子と共に処刑せよと命じる クチュクと息子は <i>kākū</i> という鳥の名を言ったので、アフマドはクチュクを殺害、息子を残すように命じる アミール、ヤサウルも殺害 ◎コンコルタイ殺害後、アルグンの報復を警戒して、7 日間アフマドのオルドの周りを軍隊が武装	クチュク処刑の経緯の記録無。シャーディーがクチュクと共に処刑 (<i>Jāmi'</i> 1134)
	1284.1.29	アフマドの甥トプト（フレグの 4 子テクシの子）がバサル・オグル、アリナク、マズク、スンジャクの子シャーディー、アチュ・シュクルチと共に▲ 8,000 騎を率いてマンスーリーヤ近郊から進軍	15,000 騎 (<i>Jāmi'</i> 1135)
57	3 日後	◎大雪→アリナクに先行していたトプトとバサルが停留 →★彼らはアリナクに、ゆっくり進めというアフマドの命令を送る	<i>Jāmi'</i> 1135
		▲アリナクは 200 兵と共にレイに行き、アルグンの工匠集団略奪 →カズウィーンで他の軍に合流	<i>Waṣṣāf</i> 127; 『集史』 はアフマドの行動として記載 (<i>Jāmi'</i> 1135)
		アルグンはこのことを知り、★ 6,000 騎と共に進軍 軍隊の司令官ユラ・テムル	
	1284.4.26 水 1284.5.1 月	★アフマド軍のトプトとアリナクの先鋒軍の後方にいる援軍部隊はフラジュ、タイチュとテクナが 1 万騎指揮 ◎アフマドは後方ビールサワールから 8 万戸軍と共に出立 →トプトの使節がアルグンの軍隊が現れたと報告。 別の使節到着	<i>Jāmi'</i> 1135
	1284.5.6 土	◎アフマドはアルダビールからアリナクの子クルミシを父のもとに派遣「もし汝達が多ければ戦うように、もし彼らがより多ければ我々が到着するまで待つように」 →アウルクを残し、アルダビールから急いで行軍。毎日 2 行程進軍	<i>Jāmi'</i> 1136

表 1-3 続き：アフマド治世 2

『モンゴルの諸情報』			他史料
頁	年月	内容	
57	×1284.5.4 火	正午の後、処女宮昇天時から日没までアルグンがトプト、アリナクとジャマール・アーバードで対戦 →★両軍の一部敗走	→木曜日 (<i>Jāmi'</i> 1136)
58	1284.5.8 月	★アルグンは一晩戦場で眠る トプト軍はジャマール・アーバード村から 10 ファルサング後退 ◎アフマドのもとにトプトの使節が到着、勝利したが、ゲジゲの軍が到着しなかったと報告 →★アフマドは怒り、軍の停留をテクナによるとみなした →◎同日、祝宴	トプト敗走 (<i>Ḥawādith</i> 435; <i>Jāmi'</i> 1136) アルグン敗走 (<i>Waṣṣāf</i> 128) <i>Jāmi'</i> 1137-38 <i>Jāmi'</i> 1138
	翌日 5.9 1284.5.11 木 1284.5.12 金	★アフマドはザンガーン（ザンジャー）に到着 ◎アフマドがトプトに追いつく、シャルウヤーズで ◎フラジュが 1 万戸の軍隊と共にライの方向に派遣される ◎アフマドは 2 日間、シャルウヤーズに駐屯	<i>Jāmi'</i> 1138
	1284.5.15 月	★キハト（アルグン異母弟）がハマダーン近郊から狩猟の口実で出立、逃亡。ホラーサーンに行った報せ届く	
	翌日 5.16 火 翌日 5.17 水 翌日 5.18 木	◎アフマドはアルマニ・ハトンをシャルウヤーズに残し出発 ★ジュシケブ（フレグ次子ジュムクル子）がバグダードから到着 アフマドは戦場であったアク・ハージャに到着	スンジャクも残る (<i>Jāmi'</i> 1138)
59	1284.5.21 日	カズウィーンで軍隊がアフマドに略奪許可を与えるよう請う ◎アルグン・アカの子ラクズィー・クルゲンがオールド・ブカと共にアルグンのもとから到着、赦しを請い、アルグンの言伝を伝える →★夜、ラクズィーを密かにオールド・ブカのもとから連れて来て、今後、アフマドに味方し、アルグンの状況を報告するように契約 →アルグンの使節達を帰す	→ラクズィーがアルグン討伐進言 (<i>Waṣṣāf</i> 129)
	1284.5.22 月	★アフマドは後からアルグンに使節を派遣し、アルグン自ら来るように、もし来ることができないならば、ユラ・テムルとシシ・バフシとカダアンと王子達を送るように伝える	
	1284.5.31 水	◎使節達が戻り、王子達のうちガザン、ウマル（チャガタイ家テグデルの子）、アミール達ノカイ・ヤルグチとシシ・バフシを連れて来た →アフマドに「戻るように、アルグン自身が来る」と伝言 ◎軍隊が弱っていたのでアミール達は戻るのが良いと考えていたが、アフマドは進軍を主張	<i>Jāmi'</i> 1139 <i>Jāmi'</i> 1138
	1284.6.2 金	アフマドはアルグンのアミール達を戻す ★ギルドクーフに到着、散策	
60	翌日 6.3 土	◎アフマドはそこから王子達のうちトガ・テムル（アフマドの同母弟）、スケ（ユシムトの子）、アミール達のうちブガとドラダイ・ヤルグチを派遣 →ブガにアルグンを連れて来るよう、彼が来ない場合、キハトを「★帰したアミール達と共に」連れて来るよう命じる →ブガはクーチャーでアルグンを見つける	ブガはアフマドに滞留進言 (<i>Jāmi'</i> 1139)
	1284.6.4 日	◎アフマドは日曜日にダムガーンに到着、略奪 →★アフマドは軍隊が弱っていたので禁じず ◎フルカーンに到着 シーラーズの軍政官ブルガン、千戸長ジュルグダイ等と共に来て服従 翌日 6.9 金 →アフマドはアリナクをフルカーンから前衛として派遣	

表 1-3 続き：アフマド治世 3

		『モンゴルの諸情報』	他史料
頁	年月	内容	
	翌日 6.10 土 1284.6.13 火 1284.6.16 金	翌日、アフマド進軍 →★ブガ・アガの使節がキハトを連れてくると伝える ◎ブガがキハトを連れて来た。 →★アフマドはブガに、戻ったアミール達を連れて来なかったことを問責。ブガはアフマドの意図を理解していなかったと弁解、→アフマドは怒る アフマドはカーラプーシュにキハトとトダイ・ハトンを残す ★クーチャーンを目指す、妻を1人も連れて行かなかった	2日間に、ユラ・テムルとアムガチン服従 1284.6.18 アフマド出立 (jāmi' 1139-40)
61		アルグンはアフマドが来たのを聞き、後退 →アフマドがクーチャーンに到着すると、城砦に逃亡	
		◎ラクズィーがアルグン妃クトルグの家を討ち、略奪 アルグンとアリナク対戦時、アルグンは人をカラウナスに派遣 →カラウナスはアルグンが負けたと聞き、帰還。前方の町を攻撃・略奪 ◎アフマドのクーチャーン通過時、ラクズィーの妻バーバー来る	Jāmi' 1140 Jāmi' 1137; Wassāf 129 Jāmi' 1140
		アリナク達はアルグンを追う	
62	×1284.5.30 木	→アリナクは城砦を降り、ハトン達と共にアフマドの許に来る →◎アフマドはアミール達に撤退しないという自分の言葉が正しかったので、母クトイのもとに行ったら、皆、各々責任を取るだろうと言う →★アミール達、特にブガはこの言葉を恐れる	6.28 (jāmi' 1141)
	×1284.5.31 金 ×1284.6.1 土	アフマドは帰還し始める ★サルチェシュメまで移動 アルグンの妃ブルガン・ハトンの宴 ★アリナク達は酔って、アフマドが王子達を殺害しない間はアフマドの支配は安定しないと話す (『集史』ではアミール達殺害)	6.29 (jāmi' 1141) 6.30 (jāmi' 1141)
	1284.6.2 日前夜	◎夜、アフマドはアルグンの監視を軍隊に委ね、カーラプーシュのトダイ・ハトンのもとに向かう ブガはアフマドが去ると、兄アルクに人を送り、アフマドが自分達をねらっている、どんな手段があるか相談 →アルクは王子ジュシケブと共にいた +◎アルク達は、ヒンドウの子クルミシからアリナク達がブルガンの宴でそのように話していたと聞いていた	7.1 (jāmi' 1141)
63		→◎ブガと共に集まる。アフマドを恐れていたテクナと団結 テクナは王子フラジュと共にいたので、帝王位はフラジュにと決定→アミール達と王子達が結託	Jāmi' 1142
	1284.7.2 月前夜	◎夜、彼らはアリナクに酒を飲ませ、アルグンを連れ出す ◎アルグン達は、アリナク、トタク等を殺害 フラジュとテクナは、王子バサルを殺害	Jāmi' 1143 Jāmi' 1144
	1284.7.3 火	→アフマドがトタク殺害を知らされ、イスファラーイーンまで戻る	
64	翌日 1284.7.4 水	◎アミール・マズクの使節が来て、全員殺害されたので逃亡を勧める →アフマドはカーラプーシュの方に逃げる	Jāmi' 1144

表 1-3 続き：アフマド治世 4

『モンゴルの諸情報』		他史料	
頁	年月	内容	
64		→ジャージャルムでシャムスディーンは、乗る家畜がないため、別の経路を使用し後で合流する許可をアフマドから得て、別れる ★アフマドとシャムスディーンに対する祈願文	シャムスディーンの逃亡について (<i>Wasṣāf</i> 134: <i>Jāmi'</i> 1156)
		★アフマドはシャルウヤーズにて、アルマニ・ハトンのオールド合流 ◎アフマドはブガの家を略奪 ユラ・テムルが捕まえられると、★アフマドは彼の到着までにアルマニのオールドに行くという命令に背き、逃げたために殺害	<i>Jāmi'</i> 1146 <i>Jāmi'</i> 1144
		アフマドはクトイ・ハトンのオールドに向かう 約 2,000 人が集合／アフマドは逃亡を望む →ソコトルと王子ユシムトの子カラ・ノガイはアフマド監視	
		◎アルグン一行はフルカーンで次期ハン決定のため集合 →逃走中のアフマドの件を優先するため、チェリク・モグールをトラダイと共にアフマドを追跡のため派遣	<i>Jāmi'</i> 1145-46 <i>Jāmi'</i> 1144-45
65		◎カラウナスに使節ボラを送り、アフマドのオールド略奪命令	<i>Jāmi'</i> 1144-45
66		カラウナスはクトイのもとに来て、アフマドを見つけオールド略奪→シクトルとカラ・ノガイはカラウナスと共にアフマド監視	
		★アルグン達はトルガジュで次期ハンについて相談 ◎ブガが「アバガの遺言は、アバガ死後の帝王はアルグンである」と証言 ←★モンゴルのヤサでは帝王位において、遺言に代わるものはなく、アミール達とカラウナス軍もアルグン即位で一致	
	1284.8.8 火 ▲8.9 水前夜 12.8.11 金	◎アフマドはコンコルタイ殺害のため裁かれる→★無言 →コンコルタイ殺害のため、殺害される 世界の帝王アルグンの即位（人馬宮の昇天） ★祈願文 ★詩	アフマドは罪を認める (<i>Jāmi'</i> 1147) 8.10 前夜 (<i>Jāmi'</i> 1148)

表2:『モンゴルの諸情報』の内容(1262-1286)とクトゥブディーンの行動

『モンゴルの諸情報』の記録		クトゥブディーンの行動	
年代	内容	年代	動向
		1236. 10	ファールス地方のシーラーズ近郊に生まれる
1253 1256	ギルドクーフ城包囲 (25-26) フレグのイラン地域到着 (23) カズウィーン北方のニザール派教主居城マイムーン城の包囲と陥落 (27-29) バグダード包囲と陥落 (30-33)		シーラーズを離れる →カズウィーンでナジュムッディーン・カズウィーニーに師事したという説あり 直接マラーガを訪れ、二人に師事したという説あり
1259 秋 1260 夏 (1261) 1264	フレグがシリア遠征に出立 (35) アイン・ジャールート戦→フレグがシリアに派兵 (36-38) フレグとジュチ家宗主バルケとの対戦 (39-41) ジャラルッディーンがバグダードでの兵の召集を進言 (39) ジャラルッディーンが兵を集め、マムルーク朝亡命 (42-43)	1259.12-1260.12 フレグ治世	マラーガに到る トゥースィーと共にフレグに面会
1265	フレグの死、アバガ即位までの経緯 (44)	1266 -1267	ムフィッディーンによりヒルカを与えられる
	1266-67年の記録なし	1266.10-67.10	トゥースィーと共にホラーサーン、クヒスターンに旅する
1268.9-1269.8	フレグがモンゴル本土に残した家族がホラーサーンに到着 (46) (['集史']によると1268年2月) 1269年から1271年まで記載なし		→この時期、ホラーサーンに滞在した可能性が高い ホラーサーンのジュワインのマドラサで、ナジュムッディーン・カズウィーニーを補佐(これをトゥースィーの旅以前とする意見もある) →イラク・アジャムヘ イスファハーンでバハーウッディーン・ムハンマドに著書献呈
		667/1268.9-1269.8	トゥースィーのマラーガ帰還
		667 以前	バグダードに向かう シャイフ・ザーヒド・ムハンマド・アル・バグダーディー (d.667/1268-9) に会う イブン・カンムーナに会う シャムスッディーン・ジュワイニーと知合う→アバガに会う
時期の記載なし (1271年)	フレグの弟ユシムト死去(['集史']によると1271年7月) ユシムトの後、弟テクシ死去 弟トブシンも死去(['集史']によると1271年9月) 1271年-1275年の記録なし	1273-4 以前?	マラーガに戻った後、ルームに向かった説あり ルーミー (d.1273) に会う サドウルッディーン・クナーウィー (d.1274) に師事 アバガと共に病床のトゥースィーを訪問
		1274.6.23	トゥースィー、バグダードで死去(ルーム訪問以前?)

(表 2 続き)

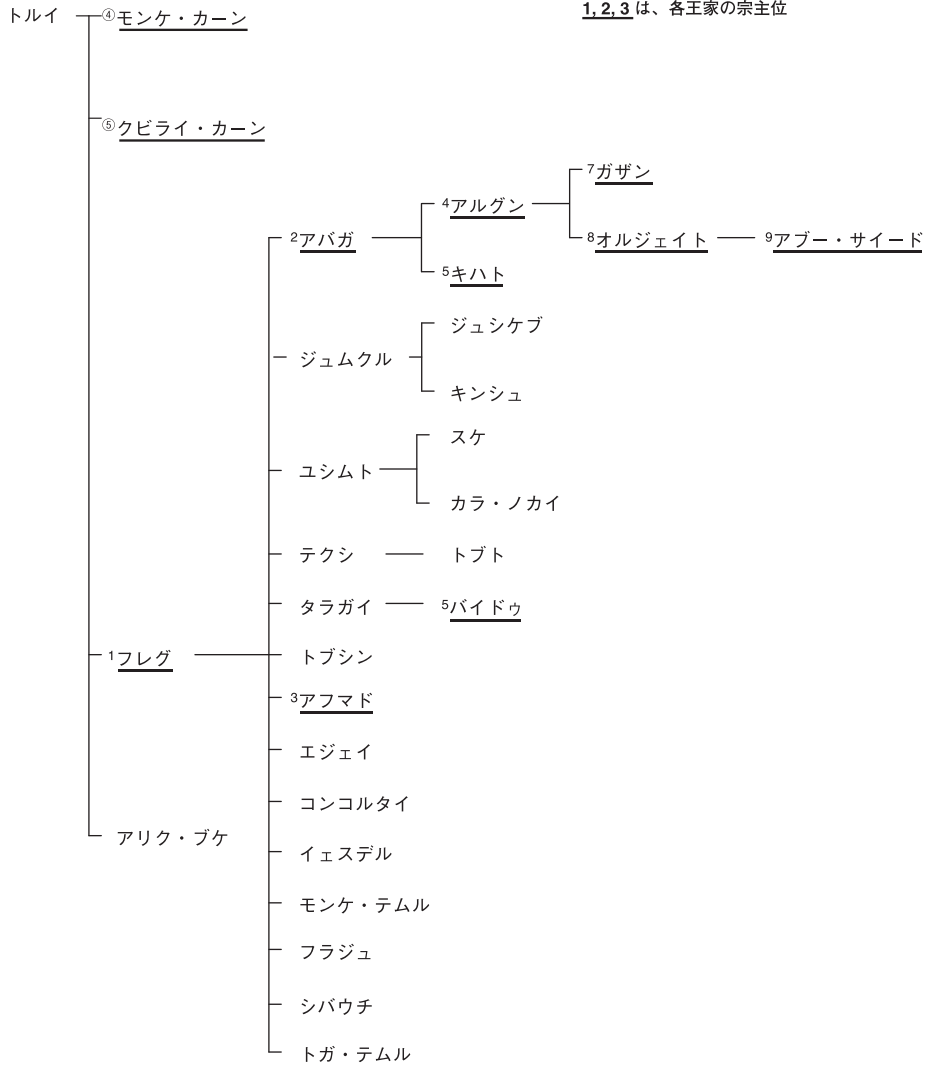
『モンゴルの諸情報』の記録		クトゥブディーンの行動	
年代	内容	年代	動向
	1271-75 年の記録なし	1273.7-74.7 以前 1274.7-75.6 頃 (1277 以前)	ルームに移動 マラトウヤ、スイヴァスのカーディー 職任命→子供も連れて行く スイヴァスに滞在
1276 1277-78	マムルーク朝バイバルスによるルーム 侵攻 (48) アバガ軍によるシリア遠征 (49) (『集 史』では 1281 年頃)		(同上)
1280-81	宰相シャムスディーンとアターマリ ク兄弟糾弾 (49-51)	1281. 11-12	スイヴァスで書き終えた著書をシャム スディーンに贈る
1282. 4-5	アバガ死去 (52) アフマド即位 (53)		アバガのもとに到る アバガ死去の際、宮廷に滞在 (Walbridge 1994a)
1282.4-83.4	アフマドが弟コンコルタイをルームに 配置 (53) (『集史』によると、1282.7.11)		
	記録なし	1282. 8.25 同年 11-12 1282. 12 頃 12831.7 1283 初春頃	マムルーク朝への使節の 1 人に任命 され、出立 マムルーク朝スルタン、カラーウーン に謁見 カラーウーンの返書完成 アレppoに到着 アフマドのもとに帰還。タブリーズに 帰還
時期不明	アフマドがコンコルタイのルームでの 圧制を知らされる (54) アフマドがコンコルタイをルームから 召還、問責 (54) コンコルタイは自らの冬営地に帰還、 アフマドに間諜を送る (55)		カラーウーンの返書には、コンコルタイ のルームでの殺戮に関する非難が記 されていた (Pfeiffer 2006b)
1284. 1.18	アフマドは、コンコルタイとアルゲン と共謀したという罪で殺害 (55)		
1284.1.29	アフマドがアルゲン討伐の軍隊を派遣 (56)	時期不明	ルームに戻る 著書『医学典範』執筆開始
1284.4.26	アフマド自身が出軍 (57)		
1284.8	アフマド処刑 (65) アルゲン即位 (65)		
(1284.10)	(シャムスディーン処刑)		
		1285.7-8 その後 685.4/1286.5-6 1286.6	スイヴァスで、著書 <i>Tuhfa al-shāhiya</i> 執筆 (Walbridge 1994a) コンヤに移動 コンヤで執筆活動 コンヤで『モンゴルの諸情報』含む写 本集成完成

トルイ家系図

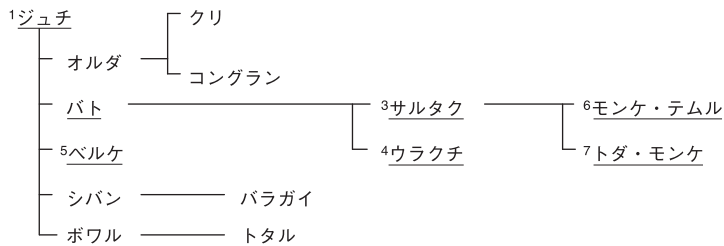
系图中的記号

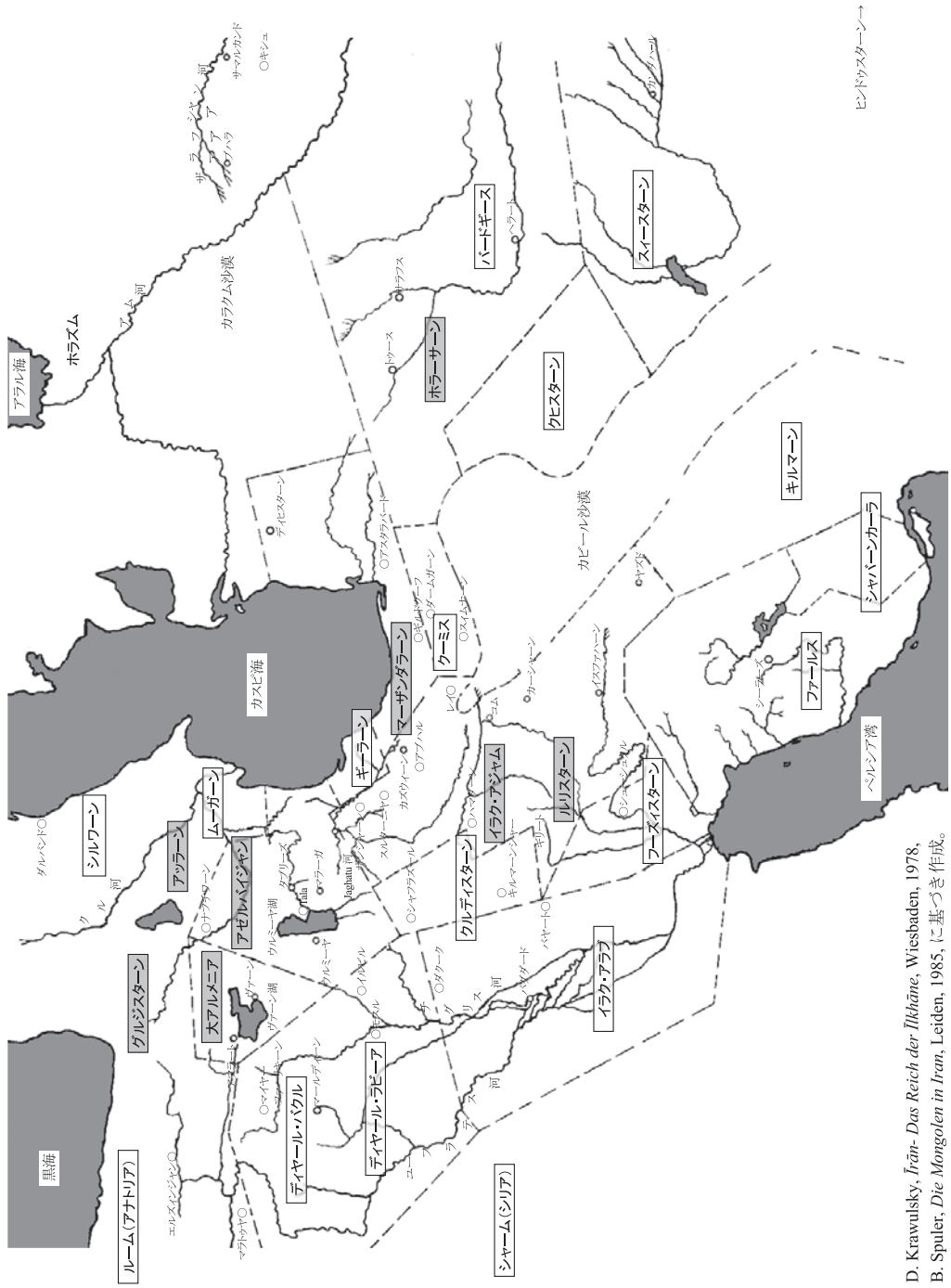
①②③……モンゴル帝国カーン位

1, 2, 3 は、各王家の宗主位



ジュチ家系図





D. Krawulsky, *Iran - Das Reich der Ilkhâne*, Wiesbaden, 1978,
B. Spuler, *Die Mongolen in Iran*, Leiden, 1985, に基づき作成。